

學 報

Kobe College Bulletin

ISSN0389-164X

NO. 184

2018.12.19

神戸女学院

学報委員会

女は大学に行くな、

学長 齊藤 言子

昨年3月、本学のブランド価値を世間に広く発信していくために「私はまだ、私を知らない」をタグラインと定め、学内外にも浸透してまいりました。これに基づき、昨年度より時期をずらして4つの電車内広告を掲出いたしました。神戸女学院の伝統と美しいビジュアルを前面に押し出してきた従来のものから打って変わり、本学のスクールカラーの濃青色の上に白地で書かれた文字のみのレイアウトで統一されました。まず「学問は就活か」（2017年6月）から始まり、「労働は時間か」（同11月）、「人生はいつだって途中だ」（2018年3月）と続き、それぞれの内容に対して、学内外より多くの反響をいただきました。「大学としての潔さ、かっこいい」「変化を恐れるか、歓迎するか」って、目が覚めた気がする」「神戸女学院大学の広告にいたく感動し、魂を揺さぶられた」「母校に誇りを感じる」等々、おおむね好評で、広い層にアピールできたことを確信いたしました。そしてこのシリーズの締めくくりとして、また新制大学設置認可70年を記念して、4月に「女は大学に行くな、」（、が重要なキーとなります）を掲



出いたしました。この言葉は強いインパクトをもって、全国レベルで大きな話題となり、新聞、雑誌、テレビなど多くのメディアにも取り上げられました。テレビは全国放送でしたので、全国の同窓生、保護者の方々からも「よく言ってくれた!」との感想が寄せられました。

また、海外にも拡散しており、来年度、韓国の梨花女子大学と台湾の文藻外語大学の学生が本学へ留学してくるようになっていますが、タグラインとこの広告の文言に感銘したことも大きな理由になったとのことです。

この12月には、また新しい広告をJR西日本、阪急、阪神、近鉄に掲出いたします。今回は各学部の卒業生にスポットが当たったものです。是非ご覧いただき、忌憚のない感想をお聞かせいただければ幸

女は大学に行くな、

という時代があった。専業主婦が当然だった。寿退社が前提だった。時代は変わる、というけれど、いちばん変わったのは、女性を決めてきた重みかもしれない。いま、女性の目の前には、いくつもの選択肢が広がっている。そのぶん、あたらしい迷いや葛藤に直面する時代でもある。「正解がない」。その不確かさを、不安ではなく、自由として謳歌するために。私たちは、学ぶことができる。この、決してあたりまえではない幸福を、どうか忘れず、たいせつに。

私はまだ、私を知らない。

神戸女学院大学

1948年3月25日、神戸女学院大学は新制の神戸女学院大学として誕生しました。

神戸女学院大学 学報委員会 発行

いです。

また、本学のタグラインが意味する学びについての扉をテーマにしたリーフレットを発行し、学生に配布しております。神戸女学院の建物にはそれぞれ形が違う扉があります。その一つ一つに「学舎が学生を育てる」という設計者ヴォーリス博士の強い思いが込められています。知らないことを知ろうとする姿勢、好奇心に導かれながら、未知の自分に出会うために、【色々な扉を開く、一つの扉と向き合う、扉を開き続けていこう】というものです。真に女性が輝く社会実現のためにその一翼を担う学生を社会に送り出していくことは、女子大学が担う大切な使命です。女性は男性に比べ、一直線のキャリアを進んでいくことはなかなか難しいという現実があります。キャリアというのは決して報酬や社会的地位が得られるいわゆる職業と呼ばれるものだけではなく、ボランティア、地域活動、家庭内での働きなど、置かれた状況の中で、それぞれが真摯に向き合い、関わり、取り組み歩んでいる道そのものが、その人の価値あるキャリアなのではないでしょうか。豊かに輝く人生のために一生学び続けていこうというメッセージなのです。

現在、各大学は多くの課題に直面しています。その中の一つとして、人それぞれの持つ個性、多様性をどのように尊重するか、本学においても様々な学生に対しての合理的配慮について、全教職員対象の研修会をおこないました。正確な知識、多角的な情報を共有し、それぞれの学生の学び、大学生活に対して、ふさわしいサポート、対応方法などを皆で再確認する貴重な機会となりました。また、時代の流れの中で、トランスジェンダーについても、女子大学間では大きな課題、話題となっています。すでに受験の門戸を開き受け入れることを発表しているところもあり、全国の女子大学が一同に会する女子大学連盟会議においても、それぞれの大学での取り組みなどが話し合われています。本学におきましては講師を迎えての講演会などもすでにいたしておりますが、今後どのような方向に進んでいくにしても、判断を迫られたときに、世間的な流れに振り回されることなく、本学の揺るがない方針を打ち出していくべきです。そのためにも皆が正しい理解と知識に沿った共通認識を持つことが必要として、勉強会を立ち上げました。

さて、華やかな嬉しいトピックのご報告をさせていただきます。

米国テキサス州のサムヒューストン州立大学(SHSU)と本学音楽学部との合同オペラが実現いたしました。SHSUとは2015年に大学間協定並びに交換留学生協定を締結し、以来活発な交流を深めてきました。そしてSHSUから、両大学の学生による合同オペラ制作の提案がありました。本学音楽学部の松浦修専任講師とSHSUのDaniel Saenz准教授が中心となって企画を練り上げ、演目はヘンリー・パーセルの「デイドとエネアス」に決定し、2018年3月23日～25日にSHSUのPerforming Arts Centerにおいて、そして、6月1日、2日には神戸女学院講堂にて合同公演をおこないました。アメリカでの公演に向けて、3月中旬には本学から松浦専任講師と声楽、ヴァイオリン、舞踊の計9人の学生が渡米し、リハーサル、本番に臨みました。到着後すぐに始まった合同リハーサルでしたが、本学学生は臆することなく堂々と現場に溶け込み、現地の学生と共に英語上演の舞台に立ち、現地の満席の観客からのスタンディングオベーションをもらう素晴らしい公演となりました。これはまさにリベラルアーツ教育のもと、神戸女学院大学で養われた幅広くたくましい人間力、豊かなコミュニケーション力、そして英語力の賜物だと、私は観客の一人として、神戸女学院大学が、学生たちが本当に誇らしく、込み上げて来るものがありました。そして、5月下旬にはSHSUより、学生38人と教員、スタッフ総勢45人が来日し、これまた満席、拍手鳴りやまない感動的な公演となりました。この合同公演に際しまして、KCC-JEEと神戸女学院大学音楽学部同窓会クラブファンタジーより学生への奨学金として多大なご支援を頂戴いたしました。改めて感謝と御礼を申し上げます。両校の協定は、本学音楽学部卒業生がSHSUのSaenz准教授の夫人であることがきっかけとなりました。この卒業生は神戸女学院の創立に深く関わられた三田藩主九鬼隆義のご子孫です。長い歴史を超えて、日米の数多くの大学の中で、点と点が結び付くような確率で神戸女学院とSHSUがこのような形でつながったこと、神様の采配と心震えるのは私だけでしょうか。

神戸女学院創立150周年が視野に入ってきてまいりました。記念すべき時に向けて、重要文化財の学舎も含め、学院全体のグランドデザインの計画も動き始めました。学生、学院教職員、同窓生、気持ちを一つにして、夢と希望を重ねて進んでいければと願っております。

KCCだより

[Kobe College Corporation (KCC) was established in 1920 in Chicago, Illinois, as a non-profit organization by a group of Christian philanthropists. Its original purpose was to provide financial support for the relocation of the Kobe College campus from Kobe to Nishinomiya. Ever since, KCC has been a strong supporter of the school, both materially and spiritually, creating opportunities for cross-cultural educational experiences for students and teachers. In 2004, the organization added "Japan Education Exchange" to its original name as its activities expanded beyond support for the school. Kobe College has benefited greatly from the generous support of KCC-JEE for many years.]

OUR INTERN HOSTING EXPERIENCE

KCC-JEE, VP for Finance-Treasurer
Ken Tornheim



The first meeting I attended as a newly elected Board member of Kobe College Corporation-Japan Education Exchange (KCC-JEE) was KCC-JEE's Annual Meeting in September 2012. At the Annual Meeting I had the pleasure of meeting Dr. & Mrs. Koichi Mori and the 2 or 3 Kobe College interns that were just finishing their internships in Chicago and Minneapolis before heading back to Japan. I was enlightened to hear the stories from the interns regarding their internship experience and their experience of staying in the United States the past 4 weeks. I thought how wonderful an opportunity for a 20 year old college student from Japan to receive both an educational experience to intern with a U.S. based business and the cross cultural experience of staying in the home of a U.S. person.

Our intern hosting experience began when my wife Naoko and I were assigned to be a host family

for the first two weeks of the intern's 4 week stay this past August. On Sunday August 19, we met Yuki Ohta. Upon Yuki's arrival, I spent time talking to her about my day to day life, and Naoko spent time as well talking to Yuki what it was like for her to start a life and raise a family in the U.S. after spending nearly the first 30 years of her life in Japan. Yuki seemed very interested in talking to us and asked a lot of questions. She was very willing to spend as much time with us as possible and speak English with me. With Chicago being such an ethnically diverse and culturally rich city, known for its museums, arts, sports and restaurants, we had many things we could introduce Yuki to. We were able to introduce Yuki and let her experience some of the great things about Chicago which included attending a Chicago Cubs baseball game at historic Wrigley Field, attending an evening concert at Ravinia Music Festival, visiting Rockford Japanese Gardens and trying food such as Chicago deep dish pizza, a Chicago style hot dog and several ethnically diverse restaurants (Mexican, Greek, Chinese, Thai, etc.). We were also able to have Yuki meet and enjoy some traditional Jewish foods with my parents, sister and other family members. The two weeks with Yuki went by very fast before she moved on to her next host family.

We feel that Yuki is now part of our family and we hope to stay in touch with her and hear about all the great things she can accomplish in life. We also had the opportunity to meet the two other interns Sara and Tsubasa. With Sara also staying in Chicago for her internship, we got to know her as well, and Tsubasa a little bit when she came to Chicago after finishing her internship in Minneapolis. Kobe College was very well represented by these students.

Being a host family was a very enjoyable experience for us. We are big supporters of the Kobe College internship program. We commend Mr. & Mrs. Go Sugiura for their efforts in Chicago, Mr. Takuzo Ishida for his efforts in Minneapolis and to the participating companies and other host families, past and present, who make this internship program as great as it is.

[コーベ・カレッジ・コーポレーション (KCC) は、1920年に神戸女学院のキャンパス移転の資金援助のために設立された、アメリカ合衆国イリノイ州を本拠地とする非営利団体 (NPO) です。以来、日米両国の学生生徒ならびに教員のために、さまざまな文化交流の機会を創出するなど、有形無形の力強い支援をおこない、神戸女学院はその活動によって大きな恩恵を受けてきました。2004年、KCCはその活動範囲を拡大するために、名前の後に“Japan Education Exchange”という副称を付け加えて、通称 KCC-JEE となりました。今回は、財務担当副会長のケン・トーンハイムさん (Mr. Ken Tornheim) が、KCC が毎年実施してくださっている、神戸女学院大学学生のための海外インターンシップ・プログラムのホストファミリー体験を語ってくださいました。]

私たち夫婦のホストファミリー体験

KCC-JEE 理事、財務担当副会長
ケン・トーンハイム

私が新しく KCC-JEE 理事となって最初に出席した会合は、2012年9月に開催された年次総会でした。年次総会では、神戸女学院院長 (当時) の森孝一先生ご夫妻にお目にかかることができました。また、シカゴやミネアポリスでのインターンシップを終えて日本への帰国を控えた神戸女学院大学の学生たちにも出会い、彼女たちの4週間にわたる研修とアメリカ滞在の体験談を聞かせてもらいました。日本の伝統ある大学の20歳の学生が、アメリカを本拠地とする企業でのインターンシップと同時に、アメリカ人の家庭に滞在するという異文化体験も享受するとはなんと素晴らしいことかと思いました。

私と妻の直子のホストファミリー体験は、私たちが8月に開催される4週間の研修の最初の2週間のホストファミリーに決まった時から始まりました。8月19日 (日)、私たちはある学生に出会いました。それ以後、私は彼女に自分の日常生活について語り、直子は生まれてから30年近く日本で暮らしてきた自分が、アメリカで新しい人生を切り開き、家族を持つということがどのようなものであったかについて語りました。彼女は私たちと会話することに興味を持ち、たくさんの質問をしてくれました。可能な限り時間をみつけて私たちと英語で話したいと思ってくれたのです。シカゴというのは多種多様な民族によって、豊かな文化的風土が培われてきた町なので、博物館や芸術活動、スポーツからレスト

ランまで、名だたるものがたくさんあります。ですから、彼女に紹介したいものがたくさんありました。幸いにも私たちは彼女にいろいろ紹介したり、体験してもらったりすることができました。かの有名なリグリー・フィールドでシカゴ・カブスの試合を観戦し、ラビニア音楽祭 (ハイランドパークで毎年6月から9月にかけていろいろなジャンルの音楽が演奏される野外音楽祭) のイブニング・コンサートに出かけ、ロックフォードにあるアンダーソン日本庭園にも行きました。シカゴ名物のディーブ・ディッシュ・ピザ (極厚タイプのパizza) やシカゴスタイルのホット・ドッグ、そしてメキシコ料理にギリシャ料理に中華料理にタイ料理と本当にいろいろな国の料理を味わいました。さらに、私の両親や家族たちと一緒に過ごす機会を持ち、伝統的なユダヤ料理も楽しみました。彼女が次のホストファミリーへ移動するまでの2週間は本当にあっという間に過ぎてしまいました。

彼女は今では私たち家族の一員です。これからも連絡を取り合って、彼女がこれからの人生の中で成し遂げて行くであろう素晴らしいことを全部知らせてほしいと思っています。同じくシカゴとミネアポリスでのインターンシップに参加していた2名の学生にも会いました。神戸女学院は素晴らしい学生さんたちを代表として送ってくれました。

ホストファミリーを引き受けたことは私たちにとてもたいへん楽しい経験となりました。私たちは神戸女学院インターンシップ・プログラムの熱烈な支持者です。シカゴの杉浦剛さん香さんご夫妻、ミネアポリスの石田卓三さん、そしてこれまでも今も参加してくださっている派遣先の企業の方、ホストファミリーをお引き受けくださっている方、みなさんがこのインターンシップ・プログラムをこんなにも素晴らしいものにしてくださっているのです。



シカゴ・オヘア空港にて

神戸女学院特別講演会
落語家という生き方
～伝統を受け継ぐ、育てる、伝える～

9月29日(土)、落語家の林家竹丸氏を講師にお迎えて、神戸女学院特別講演会「落語家という生き方～伝統を受け継ぐ、育てる、伝える～」が講堂で開催されました。

竹丸師匠は兵庫県宝塚市のご出身、神戸大学経済学部を卒業後、NHK 記者として徳島、大阪でニュース取材に携わっていらっしゃいました。ところが、1995年1月17日未明に発生した阪神・淡路大震災で被災、震災取材が一段落した同年8月にNHK を退職して上方落語の四代目林家染丸師匠に入門、落語家として生きる道を選びました。

現在は落語会に出演する傍ら、2011年度からは京都造形芸術大学文芸表現学科で講師として伝統芸能の講座を担当なさっています。また、2015年度後期NHK 連続テレビ小説「あさが来た」に、大阪商人の役で20回ほどご出演になり、そのご縁で主人公の実業家、広岡浅子の奮闘を描いた落語も創作なさるなど、幅広くご活躍です。

学生時代に大学祭の岡田山をお訪ねになった思い出から、NHK 時代、落語家への転身を決心されたこと、修業時代、そして現在の活動までを、楽しく語ってくださり、更には落語を一席ご披露くださいました。

舞台転換の間には、義姉にあられる学院オルガニストの前田直子様のパイプオルガン演奏もあり、盛りだくさんの内容となりました。

「伝統を受け継ぐ」とは、教わるものではなく、「見る」ことによって学んでゆくものというメッセージを心に刻んでおきたく思いました。

講演会終了後は、学生ツアー・マイスターによるキャンパスツアーがおこなわれ、先輩たちに交じって、今年度のプロジェクト科目受講生およびツアー・マイスター養成講座受講生23名が新たにデビューいたしました。台風の接近が心配されましたが、「晴れ男」でいらっしゃる竹丸師匠のおかげで、時折の雨も小雨程度でおさまり、120名あまりの方々にご参会いただきました。以上、感謝とともにご報告させていただきます。

(院長室課長)

神戸女学院 特別講演会
落語家という生き方
～伝統を受け継ぐ、育てる、伝える～
講師：林家竹丸氏 (落語家)

無題 2018年9月29日(土) 13:00 開場
有題 13:30-16:00 13:30-15:00 講演会 林家竹丸氏
15:00-16:00 学生ツアー・マイスターによるキャンパスツアー
無題 神戸女学院講堂 ※ツアー時間外の講堂以外の校舎への立ち入りはできません

申込不要・無料 ※当日会場は変更してありませんが、文学部2号館1階のコピコニーストア
および外で観覧の際はご遠慮ください。

申込方法
申込受付期間 9月15日(月)～20日(土) 15時～18時
申込方法 申し込み用紙をダウンロードして印刷し、お申し込みください。
申し込み先 文学部2号館1階 コピコニーストア
〒650-0192 兵庫県神戸市中央区 神戸女学院
TEL 078-51-6555 http://www.kobe-c.ac.jp

特別講演会
落語家という生き方
～伝統を受け継ぐ、育てる、伝える～
講師：林家竹丸氏

落語は、漫才や他のお笑い芸と同じ大衆芸能です。観客の反応を敏感に取り入れ、柔軟に形を変えて生き残ってきました。一方で、数百年の歴史を持つ伝統芸能でもあり、歌舞伎や文楽などと同様です。その演じ手である落語家は何を受け継ぎ、次の世代へ伝えていくのか。大阪を拠点に活躍中の講師が、入門のいきさつや、修業生活の様子、稽古方法、楽屋のしきたりなどを語り、「伝統とは何だろう」ということを皆さんと一緒に考えます。落語の実演もあります。演目は当日のお楽しみ。

特別講演会ちらし

重文建物美装化（一期）と講堂耐震補強完了

講堂の耐震改修については、2012年に実施した調査の結果、屋根瓦を全面撤去し、シートによるせん断補強をおこなう計画案が示されましたが、講堂が長期間使用できなくなり、軒先の意匠に影響が生じる等、実施するには困難な課題がございました。そこで大きな解体が不要で、内外観に影響が生じない工法の再検討を昨春よりはじめ、一度外された跡が^{なが}残る2階席天井部に搬入用の開口を設け、「居^{なが}から改修」により鉄骨小屋組の補強をおこなう計画を策定し、文化庁の内諾を得た上、株式会社竹中工務店設計部に構造設計を委託しました。折よく募集がおこなわれた文部科学省の緊急特別推進事業の補助金交付も決定し、入札を経て施工についても竹中工務店にお願いすることとなりました。3月末にまずは総務館1階の壁に耐震スリットを施工、続いて5月から毎夕18時以後に小屋裏内で作業をおこない、補強材「耐震ケーブルブレース」の取付を8月末に無

事完了、講堂の耐震性能を示すIs値は0.58から0.89に向上しました。

同じく昨年度に策定した理学館と総務館の外壁・スチール建具の経年劣化部補修計画についても、文化財建造物魅力向上促進事業として国の補助金が交付されることになり、入札の結果、松井建設株式会社と契約を締結しました。まずは夏季工事として講堂東・北面と理学館東面の美装作業を進め、台風の影響により10月半ばに漸く完了しました。外壁を黒ずませていたカビ等の汚れが洗い流され、建具の塗装替やパテ補修他の手入れを終えた外観は、経年による風格を維持しながら、建築が内包する光を穏やかに放つように感じられます。続いて冬季に実施するソールチャペル周り^りと総務館中庭側の美装化については2019年3月中旬に完了予定でございます。

(施設課長)



講堂とチャペル裏及びサッシの施工前後の状態

学院リトリート報告

全国的に異常な暑さが続く中、前期最終日となる7月27日(金)に学院リトリートをおこないました。学院リトリートとは、学院全体でキリスト教主義と建学の精神について学ぶことを目的としています。なかなか落ち着いて考えることが難しい日々の中、キリスト教を軸に色々な視点から自分の職場について考えるひと時になればと願っております。

今年は、新たに院長に就任された飯 謙先生により、「『愛神愛隣』の淵源と射程—建学の精神を学び、考え、生活する』と題してご講演をいただきました。まず始めに、2006年(当時 院長松澤員子先生)から始められた学院リトリートの歴史と目的を語られました。そして、本学のキリスト教主義について、学院永久標語「愛神愛隣」の淵源について語られました。最後に「愛神愛隣」の射程、本学の教育の目指すべきところとし、変わらないために変わり続けなければいけないこと、隣人に遣える思いを持ち、独自性のある校風を守り続けながら学校の思想をさらに深めることが必要であると語られました。分団に分かれた後はお話をふまえてお互いに意見や疑問を話し合い、とても価値のあるひと時を過ごすことができました。短い時間でしたが教職員が一同に会し、学院について共に考えるという大切なひと時をもてましたことを感謝し、新たな気持ちで職場に戻られるよう心よりお祈りいたします。

日 時：2018年7月27日(金) 14:00～16:00

場 所：H-301教室

(メアリー・アンナ・ホルブルック記念館)

参加者：88名

講演：飯 謙 院長

開会礼拝：安森 智司

全体司会：中野 敬一

閉会礼拝：大門 光歩

(チャプレン室)



学院リトリート

2018年度 宗教強調週間

プログラム

〈11月5日～11月9日〉

- 11月5日(月)
 早天祈祷会 文学部 英文学科 3年生
 中高部礼拝 学院チャプレン 中野 敬一
 チャペルアワー 中野 敬一
- 11月6日(火)
 早天祈祷会 高等学部 3年生
 中高部礼拝
 「弱さを誇れますか？」
 同志社大学 神学部教授 石川 立
 チャペルアワー
 「『人生は戦い』でしょうか？」 石川 立
 全教職員礼拝
 「神さまの無力」 石川 立
- 11月7日(水)
 早天祈祷会 人間科学部 心理・行動科学科 2年生
 中高部礼拝
 「あなたは愛され必要とされている」
 宝塚市民病院 緩和ケア病棟
 チャプレン・カウンセラー 沼野 尚美
 チャペルアワー
 「安らぎを運ぶ器」 沼野 尚美
 中高部PTA のための宗教講話
 「今を生きるコッーより良く生きるために—」
 沼野 尚美
- 学生寮 夕拝 「Stand by Me」
 須栄短期大学准教授・宗教主事、
 本学キリスト教学講師 森田 喜基
- 11月8日(木)
 早天祈祷会 高等学部 3年生
 中高部礼拝
 「あなたは、本当は何を願っている人？」
 基督教独立学園高等学校 前校長 安積 力也
 チャペルアワー
 「あなたは“出発”していますか？」
 安積 力也
- 同窓生のための宗教講話
 「永遠を思う心」 安積 力也
- 11月9日(金)
 早天祈祷会 文学部 総合文化学科 3年生
 中高部礼拝 音楽礼拝
 中高部生徒・喜多 牧子
 アッセンブリーアワー「宗教音楽の会」
 ヘンデル メサイヤより
 《シオンの娘よ、大いによろこべ》他
 音楽研究科1年

＜大学チャペルアワー＞

今年度は宗教強調週間講師として、同志社大学神学部教授の石川 立氏、宝塚市民病院 緩和ケア病棟チャプレン・カウンセラーの沼野尚美氏、基督教独立学園前校長の安積力也氏、以上3名の先生を講師としてお迎えしました。

11月6日(火)は石川 立先生により「『人生は戦い』でしょうか?」と題してお話いただきました。私たちは競争社会の中に生き、「戦い」という言葉を安易に使っているが、人生は戦いであると表現するのではなく、聖書の言葉を用いることにより人生を豊かにすることができるとお話されました。キリストが私たちの人生の中に入ってくださり、共にいてくださいます。人生は戦いではなく、愛と平和に満たされたものになりますようにと祈りをこめられました。

7日(水)は沼野尚美氏により「安らぎを運ぶ器」と題してお話いただきました。患者との対話やご自身の旅先での経験を通し、何もできなくても、何も言えなくても、温かい存在感で側にいて、「あなたは一人じゃない」というメッセージを心に届けることが大事だとお話されました。そのためにも、あたたかい表情が大切であること、イエス様からいただいた安らぎを周りに届けられる人になって欲しいと呼びかけられました。

8日(木)は安積力也先生により「あなたは“出発”していますか?」と題してお話いただきました。まず「皆さんは誰にも見せたことのない自分がいますか?」と問いかけられました。教鞭をとられていた学校での話をもとに、周りに見せている自分ではなく、嘘のない心の中の本当の自分から出発する勇気をもつことの大切さ、また、祈りの世界は嘘をつかなくていい世界であることを語られました。そして、心の中ではこのままでいけないと分かっているも何もできない、ぬるま湯のような安全地帯から出ていく勇気もちたいという新潟の高校3年生の言葉を紹介くださり、お話を閉じられました。

6日(火)の全教職員礼拝では、石川 立先生に「神様の無力」と題し、人間の無力さは神様の弱さにつながっており、苦しみを共に担ってくださっているという励ましのメッセージをいただきました。続けて永年在職者表彰式がおこなわれ、長年ご奉仕くださった教職員の方々へ感謝のひと時をもつことができました。

期間中、毎朝8時から早天祈祷会がまもられ、若き姉妹の証を聞くことができました。共に祈るひと時を神戸女学院に連なる者で守ることができ、とても嬉しく思います。

ご多忙の中お越しく下さり、一日に多くの講演をしてくださった講師の先生方に深く感謝申し上げます。

(チャプレン室)

＜中高部礼拝＞

11月5日(月)から11月9日(金)まで、「宗教強調週間」として特別礼拝を守りました。

5日(月)は中野敬一学院チャプレンから「隣り人を愛する」という題で奨励をいただきました。隣人が与えられることの喜びと、よき隣人として生きることの喜びを学ぶ機会となりました。6日(火)は石川立氏から「弱さを誇れますか?」という題で奨励をいただきました。困難の中にあっても、共にいると約束してくださる神に信頼して生きることで、その弱さの中に神の働きを見出せるのだと思わされました。7日(水)は沼野尚美氏から「あなたは愛され、必要とされている」という題で奨励をいただきました。「あなたはわたしの目に価値高く、貴いのだ」と語ってくださる神の言葉に答えて生きることも大切さと、「あなたはかけがえのない存在なのだ」という言葉を伝えていくことの大切さを思わされました。

8日(木)は安積力也氏から「あなたは、本当は何を願っている人?」という題で奨励をいただきました。ご自身の思春期の苦悩と教師としての経験を通して、自分で考えるということの大切さ、「空っぽの自分」から始めることの意義を教えてくださいました。9日(金)は音楽礼拝でした。JSコーラス部と喜多教諭による賛美のご奉仕をいただきました。

早天祈祷会では、6日(火)にS3の生徒が、8日(木)にはS3の生徒が奨励をしてくださりました。

中高部では、7日(水)の昼には「PTA 宗教講話」を開催し、沼野先生に「今を生きるコツ～より良く生きるために～」というテーマでお話いただきました。(参加者78名)

また、放課後にも「KCH 白熱教室」と称して特別プログラムを実施いたしました。5日(月)は大学で研鑽を積んでいる卒業生4名、7日(水)は既に働いている卒業生2名をお招きして、語らいの時を守りました。8日(木)はS自治会主催の「ジョグトーク!!」が開催され、参加者は熱心に話し合っていました。9日(金)には内田樹名誉教授をお招きし、「『今』を生きるために」というテーマでご講演いただき、参加者の質問にも丁寧に答えてくださり、「白熱教室」らしい時間となりました。

今年の宗教強調週間も恵みに満ちた1週間になりましたことを、喜びと感謝をもって、ご報告させていただきます。

(中高部チャプレン)

<留学報告>

マサチューセッツ工科大学での1年間

立石 浩一

2017年9月から1年間、米国ボストン近郊のケンブリッジにあるマサチューセッツ工科大学（MIT）に海外留学をしました。

ケンブリッジはボストンの西隣り、ハーバード大学、MIT、さらに近隣にもタフツ大学、ボストン大学をはじめ、名だたる大学がひしめき合っている地域になります。

MITでは、言語哲学科の訪問研究員として所属し、大学院生、時には学部生と一緒に講義に出席をしたり、研究についてゆっくりと教授陣や院生さんとお話をする時間をとっていただいたり、中身の濃い毎日を過ごさせていただきました。言語哲学科のある建物、Stata Centerは、Building 20という、第二次世界大戦中に米軍用のレーダーを開発していた由緒ある建物を建て替えたもので、その痕跡がそこかしこに見られ、大変興味深いものでした。

主に、言語情報の焦点（focus）がイントネーションとしてどのように発話され知覚されるかなどについて研究をおこなっており、成果を1月のアメリカ言語学会、及び7月に南アフリカでおこなわれた国際言語学者会議にて発表しました。MIT内部でも2度発表の機会をいただきました。

折しも、アメリカはトランプ政権の影響がじわじわと忍び寄る状況、ある意味時代の重要な分岐点に居たわけですが、その点も含め、今回このような機会をいただいたこと、心より御礼申し上げます。

(英文学科教授)



チャールズ川、ボストンを背に

史料室の窓(47)

岡田山の自然

神戸女学院史料室 佐伯 裕加恵

「神戸女学院のキャンパス全域を客観的にみると、緑が多く、地形をくずすことも少ないので、外形的に美しくみえます。このことは、まず第一印象が良いという点で、一種の『得(と)く』をしていると思われる。誰の目にも『すばらしい』と映る『得(と)く』の要素は、キャンパス内の建築物とその背景を構成する『緑』によっているのです。」(『岡田山の自然』神戸女学院百周年記念「岡田山の自然」出版委員会、昭和49年、81-82ページ)

ご存じのように、神戸女学院は2014年に現存する12棟のヴォーリズ設計の校舎を含むキャンパスが国の重要文化財の指定を受けました。その時、単に校舎のみではなく、周りの自然環境も指定の重要な要素になったことは記憶に新しいと思います。

キャンパスの設計者・ヴォーリズ(William Merrell Vories)は自然との調和を大切にして、岡田山の学舎を設計しました。それは見た目の美しさだけでなく、その中で生活するすべての人の心までも考えて作られたからです。

神戸女学院は岡田山という山の上にキャンパスを構えていますから、住宅地の中に学校があるとは思えないほど、キャンパス内は自然にあふれ、自生種が多くあり、良い環境に恵まれています。

「女学院が都会地の学校にみられない豊かな自然をもっていることは、日本のどの学校よりも立派な環境をもつ学校として、自負に値するものと思われます。」(前掲書77ページ)「岡田山の緑は、過去においてはよく保護されてきました。」(前掲書75ページ)

創立80周年を過ぎたあたりから、キャンパス内には新しい建物が増えていきました。学生数の増加や、授業のための設備の整備等、教育機関としてはしなければならないことではありました。また、1995年に起きた阪神・淡路大震災で被災し、失われた建物もありましたので、新館建築に際しては周りの自然環境にも配慮してきました。ですから、現在でも中庭から見える景色はキャンパス移転当初と変わってはいません。

自然とは、もちろん植物だけを言うものではありません。ここに集い来る野鳥や昆虫たちもその中に含まれます。

自然環境への配慮ということ言えば、エミリー・ブラウン記念館の建築計画が変更になったと



『岡田山の自然』

いうことがあります。2007年、新聞にも大きく取り上げられたので、ご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが。2005年、ある学生がキシノウエトタテグモという希少なクモを卒業研究で調査しました。その生息地周辺に新しい校舎が建てられるという話を聞いた学生は指導教授に進言し、教授があらためて調査をおこない、建築委員会等にその旨を報告しました。委員会ではこのことを諮り、クモの保護を優先することにした結果、記念館建築は当初の計画から変更されたのです。

「極端かも知れませんが、岡田山を裸にした場合、現在までの名声が以後も続くかどうかはいささか疑問です。『緑の量』が人の『良心の量』に比例すると考える人々が増えつつある現在、『緑の量』の減少はキャンパス全体の価値の減少を意味します。」(前掲書82ページ)

神戸女学院は周辺の自然環境も含めた形で重要文化財になりました。文化財になったということは、この自然は学校だけのものではなくなくなったということの意味します。

「今や女学院の緑は、女学院だけのものではないのです。周辺では勿論のこと、西宮市南部一帯の中心的緑地域となっているのです。『緑とその量』が持っている真意を、今一度考えなおしてみる必要があると思います。」(前掲書83ページ)

44年前の言葉が私たちに語りかけています。

<キャンパスお気に入りの場所>

向こう側の景色

神戸女学院の建物の多くは渡り廊下で繋がっています。雨の日でも濡れずに建物間を移動できる渡り廊下は非常に便利でありがたい存在ですが、晴れた日は、私は渡り廊下を通らずに、敢えてその外壁に沿って廊下の外側または内側を歩くようにしています。

建物と建物の間を渡り廊下で結ぶことによって、一つの大きなキャンパス空間から、複数の区切られた空間が生まれます。

渡り廊下に設けられた扉や窓、門型開口部（以下、開口部）から臨み見ることが出来る景色は、今いる場所とは違う向こう側の空間の景色となります。

そのような向こう側の景色が見える場所が私のお気に入りの場所です。

車が通れるように作られた開口部は全部で4箇所。

講堂からグラウンドに向かう開口部からは桜並木やイチョウなどが見え、その開口部をくぐると突然、講堂の静のイメージから、グラウンドや体育館の動のイメージにワープします。

講堂と文学館を結ぶ渡り廊下には、中庭に向かうための開口部があり、木々の間からは人間科学部の建物の一部が覗いています。初めて訪れる人であれば、どんな建物だろうかと誘われるように中庭に向かうのではないのでしょうか。

これらの開口部や扉に向かう際は、少し遠くから景色を楽しみ、開口部をくぐる時は歩調を緩め、景色の変化とともに空気の変化も楽しむことで、忙しい日々の中であっても岡田山の自然と建物が心を浄化してくれるのを感じます。

(施設課)



静から動へ

グラウンドと空

数年前、縁あって体育研究室での職をいただきました。その頃の私はといえば、家庭でのあんなことやこんなことで、今思うと少し病んでいた？かもしれませんが。そんな時、谷門からの通勤。森の中から、開けたグラウンドへ。体育館や銀杏が、「おかえり」と言ってくれたかどうかは分かりませんが、「あ、ここにも私の居場所があったんだ」と母校のありがたさを、その大きな空間から感じたことを思い出します。それから、グラウンドとその上に広がる空が、私のお気に入りの場所となりました。

よく「時間が解決してくれる」と言いますが、大きな空間にもそんな癒しの効果があるのではないかと思います。グラウンドはなんだか、清々しい気持ちにさせてくれます。

朝、息をきらして上りついたグラウンドでは、朝練に励む学生、陽を浴びる木々、私の血管年齢も少しは若返ったのでは？と勘違いしそうな爽やかさです。午後はといえば、「昼間からこんな大きな空を望めるなんて、学校職員の特権よね」と心の中でつぶやきながら遠くの飛行機を見送り、リフレッシュです。そして、業務を終えた夕刻。明日の天気はどうかと、分かりもしませんが白い月の出た空を仰ぎます。今日もお疲れさま。安堵の気持ちでグラウンドを眺め、今度は家事への活力をもらいます。

明日は是非、グラウンドの癒しを体感してみてください。

(体育研究室)



秋のグラウンド

大学報告

「和紅茶」の産学連携開発と ルクアでの試飲販売

紅茶は、長い間世界中で飲まれ続け、また紅茶ポリフェノールやカフェインなど健康に役立つ成分を豊富に含むことから、世界中で研究されている飲み物です。私たちの研究室でも紅茶の機能性について取り組んでいます。その中で、鹿児島産の「べにふうき」という日本産の紅茶に出会い、そのおいしさに魅了され、米寿(株)さんと産学連携商品の「神戸女学院大学の和紅茶」を開発しました。商品は、べにふうき茶葉のみの「気品あふれるべにふうき」と、佐賀産の乾燥イチゴをブレンドした「魅惑のイチゴを添えて」の2種類です。

ゼミ生12名全員で、茶葉の選抜、ブレンドする果物の検討から、パッケージデザインまで取り組みました。

また10月には、梅田のルクアの地下にあるキッチン&マーケットで、1週間限定の和紅茶の試飲販売をおこないました。ゼミ生たちも神戸女学院ブランドの和紅茶のおいしさや機能性についてお客さんに熱心に説明し、多くの方に買っていただくことができました。

「まさか大学に入ってこんなことができるとは思わなかった」と、みんな達成感に満ちた笑顔を見せてくれました。これからも紅茶を通して、多くの方の健康と笑顔に貢献したいと思います。

(環境・バイオサイエンス学科教授 高岡 素子)



ルクアでの試飲販売

後輩と共に考える、「より良い大学生活」

文学部 英文学科 4年生

10月16日(火)、学生主催の講演会を開催。『女性のビジネスとメディア論』と題したこの会は、実際に社会貢献ビジネスを展開する女性青年実業家をゲストに招き、彼女の事業例と開業までの経緯、ソーシャルメディアを商業にどう活かすかなど多岐に渡ってお話いただいた。

今回の講演会を開催するにあたって、自身の大学生活を振り返りながら「大学4年間をどう過ごすか」がいかに関係形成や就職活動に大きく影響するのかを考える契機となった。入学から約3年半の間に多くの知的好奇心を持ち、国内外問わず学生の域を超えた活動ができたのは「ネットワーキング」が功を奏した結果だと確信する。名前と連絡先のみを記した簡単な名刺を片手に国際会議に参加すれば、普段話すことすら憚られる社会人の方と対等に話す機会を得ることができた。初めは相手にもされず「やる意味があるのか」と自信をなくすことも多々あったが、根気よく続ければ相手が折れてくれることもしばしば。社会を知る、良い人生勉強となった。

卒業を間近に控えた今、後輩たちに伝えたい。「何でもやってみなければ分からないし、人生は偏差値では決まらない。」女性の社会進出が叫ばれる中、男女就職率の差は縮まってきているが、女性差別が未だなくなるのも事実。女子大学へのイメージも様々だ。しかし、何事もどう捉え、どう活かすかが成功の鍵ではないか。私は胸を張って「神戸女学院で良かった」と思う。



講演会の様子

プロジェクト科目「神戸女学院を創る」 —岡田山移転期の神戸女学院とヴォーリス建築—

「本学の歴史と特徴ある学舎建築について深く理解した」学生の育成を目的とし、昨年度から新たに始められた授業です。全学部の学生に開かれており、昨年度は34名、今年度は14名が履修しています。授業は以下の4項目を中心に進められます。

①岡田山移転期の歴史や学舎建築に関連する講義。会衆派教会の歴史と精神、山本通時代の神戸女学院の歩みと宣教師の働き、校地移転の経緯、学舎建築構想等を飯院長からご教示。

②本学のヴォーリス建築群の見学学習。重要文化財12棟の各所で井出院長室課長によるご説明。建物屋上や屋根裏、地下室など普段見る機会が無い場所に入れるのが魅力です。元一粒社ヴォーリス建築事務所の方からも全国各地のヴォーリス建築に見られる特徴を専門家の立場からご説明いただきます。ヴォーリスの生涯や思想についても学びます。

③ヴォーリスが活躍した近江八幡市を訪問。ヴォーリス記念館やハイド記念館、ヴォーリス記念病院チャペル等を見学。初期のヴォーリス建築の特徴やヴォーリスが愛した土地を肌で感じる機会。

④授業を通じて学んだことを人に伝えるためのレクチャー。本学院の「ツアーマイスター」(重要文化財一般公開時のガイド)資格取得希望の学生には良い準備となります。

この授業を通じて学生が自分たちの学舎と学院史への知見を広め、神戸女学院への母校愛を深めてくれることを期待しています。

(授業コーディネーター

総合文化学科 中野 敬一)



ハイド記念館前で

防災ウォッチ in 名古屋

大学では副専攻プログラムB (17000学生以降は特色プログラム) の一つとして、地域創りリーダー養成プログラムを開講しております。このプログラムでは学生を複数の班に分けて、各々が地域の方々と連携して地域の課題解決のための取り組みを企画・実行する授業を実施しております。その班の中の一つ、防災班は、8月26日(日)に名古屋市港防災センターでおこなわれた防災イベント「防災ウォッチ2」に参加しましたので、ご報告いたします。

この「防災ウォッチ」というのは、子どもたちにもわかりやすく防災教育をおこなうために、災害時に注意しなければならないものや、身を守る役に立つものを妖怪に例えてキャラクター化したもので、同プログラムの学生たちが3年ほど前に発案したものです。

名古屋市港防災センターでは、昨年度より「防災ウォッチ」と銘打って、防災関連のさまざまなコーナーを設けたイベントをおこなっていただいております。本年度は、本学から防災班の学生5名が参加して、午前と午後各1回ずつ、イベントに来場した子どもたちを対象に、自宅地震にあった小学生姉妹が避難所に避難するまでの寸劇を、クイズを交えながら演じました。また、その後子どもたちも参加して簡単なゲームをし、楽しく防災学習をおこないました。

地域創りリーダー養成プログラムでは、今後もこのような取り組みに積極的に参加していきたいと考えております。

(人間科学部 ESD 推進室)



防災ウォッチでのゲームの様子

卒業生を起用した交通広告を掲出

12月1日(土)より、交通広告(電車内広告)を掲出します。JR西日本(普通電車)、阪神(全線)、近鉄(大阪線・奈良線)が12月1日(土)から1ヶ月間、阪急(全線)が12月4日(火)~24日(月)の3週間、各車両のドア横に掲出しています。

今回は卒業生の方3名にご登場いただき、本学での学びとその延長線上にある今について語っていただいています。広告ではメッセージ一文だけになっていますが、詳細は広告用に設置したネット上の特設サイトでご覧いただけます(「学ぶってなんだろう」で検索)。

(学長室)



広告3種のうちの1つ(英文学科卒業生)

連続テレビ小説「まんぷく」ロケを実施

さる6月23日(土)、NHK「まんぷく」ロケ隊が学院を訪問し、昭和10年代の大阪という設定のもと、中庭(主人公と友人の昼食シーン)、理学館入口及び渡り廊下(主人公の姉が入院している病院)で撮影をおこないました。約3時間の撮影に対し、放映はほんの数秒でしたが、作品づくりへの真剣な姿勢が感じられるひと時で、偶然居合わせた学生生徒たちにも良い刺激となったのではないかと思います。既に放送済みですが、再放送もありますので、ぜひご覧ください(第1、10、11話で放映)

(総務課)



理学館(病院の設定)設営風景

LL 教室が新しくなりました

教鞭をとられる先生とそこで学ぶ学生たちが共にワクワクするような環境を作りたい。長年カセットを中心としていたこの教室は、PCを中心とした語学学習を情報処理管理の2教室に任せ、対人コミュニケーション力を中心にプレゼンテーションやグループワークを通じて様々な能力を磨くための教室として生まれ変わりました。サイドテーブル付回転椅子(21色)、全面ホワイトボードの壁、高輝度プロジェクタ、プレゼンテーション台、グループ学習ツール等を導入しました。学習端末の導入も予定しています。

(視聴覚センター)



改修された教室と授業風景

<留学生紹介>

茅渚の海の面（ちぬのうみのも）に

神戸女学院大学は「国際化の推進」の目標のもと、交換留学生数を増やして国際交流が更に活性化することを願っています。2018年9月には新たに6名の交換留学生を米国（ワイオミング大学・ポーリンググリーン大学）、韓国（徳成女子大学）、中国（広東外語外貿大学）から迎えました。2018年4月から留学中の台湾（文藻外語大学）からの1名と合わせて、現在7名の交換留学生が在学中です。全員が学生寮に滞在していますが、今年度も家庭会から留学生寮費への経済的ご支援をいただいております。この場をお借りして改めて心より御礼申し上げます。

さて、交換留学生たちはどうして神戸女学院への留学を希望したのでしょうか？日本語・日本文化への関心、アニメやドラマなど理由・きっかけはひとそれぞれですが、中には過去の留学経験者の「少数教育をはじめとする本学の充実した学習環境」への高い評価が決め手となった学生もいます。これは卒業生・教職員をはじめとする皆さまの長年に渡る国際交流事業に対するご支援の賜物にほかならず、本当にありがたく感謝に堪えません。

創立以来「国際理解」を教育の柱のひとつとしてきた神戸女学院でのよき学びと交流の機会を通して、交換留学生の皆さんが日本と世界、また自分自身についての新しい発見をすることができるように、そして彼女たちの人生が本学での経験によって更に豊かで実り多いものになることを心から願っています。

（国際交流センター課長）



飯院長との懇談のひとつ

<留学生自己紹介>

ICHIGO ICHIE

アサンプシヨン大学交換留学生

It is a truly remarkable experience—this is how I will sum up my whole trip as an exchange student in Kobe College. Being an exchange student to a country where I cannot barely understand the people made me appreciate a lot of things about life. It has led me to things that I have never been done before and surprisingly it turned out more than I expected. This opportunity lead me to meet different people and we share experiences. I truly enjoyed every single class especially the tutorial for exchange student because I get to discover new things that would help me grow as a person. Aside from the classes, we also had the chance to explore the city and it was truly amazing. Japan for me felt like a home away from home. As I go back to my hometown, the Philippines, I carry all my new learnings and experiences that I could share to my family and friends. This made me learn new things about myself as well and I am truly thankful and grateful to be given a chance to become one of the students to represent not only our school but also our country as well. Kobe College already has a place in my heart and I cannot wait to go back, it is a completely great experience that you would not regret.

庭と新しいキャンパスライフ

徳成女子大学交換留学生

神戸女学院大学は不思議と心が平和になれる所だと思いました。それが綺麗なキャンパスのせいなのか、四季の花が満開する庭のせいなのかは分らないけれども、時間が緩やかにながれるノスタルジ的な学校で、4ヶ月はあっという間に過ぎてしまいました。

日本に訪問したのはこれで2回目です。留学は当たり前の話ですが、旅行とは全然違って、日本を見る目も変わりました。普段なら絶対声をかけない人に声をかけて友だちになったり、絶対に寄らないような店に寄って、買い物をしたりするのです。もちろん日本語の勉強も大事なことでしたが、私が日本に留学してきて一番重要に考えたのが新しいことをしてみよう、ということでした。新しいことに挑戦するのももちろん怖いことです、最初はなにも知らずに日本に行ってもいいものか、不安でした。でも、いざ日本に行っても国際交流センターの助けを借りて一つ一つやっていたら日本にもすぐ慣れました。

でも、やっぱり失敗も多くて、駅で道を探すのも難しくよく迷ったり、教室を間違えたりしました。そんな時、いつも頼りになるのがバディや他の学生の方々でした。困った時だけではなく、皆さんと話す時に日本人の考え方や情報を知ることができました。他にも私と一緒にの時期に留学に来た世界中の留学生たちと授業やパーティーなどでも会う機会が多くて、本当に仲良くなりました。全然知らなかった国から来て、同じ言語で話せるのがどれほど楽しくて嬉しいことなのか、経験したことがない人には絶対分からないでしょう。これからもっと留学生が増えて、貴重な経験をする方々がもっと増えたらいいな、と思いました。

小さいが確実な幸福

淑明女子大学交換留学生

8月神戸の花火大会で花火を見ながらこの4か月間の留学生生活を振り返った。レザージャケットを着て日本に来たのに、今はこんな暑い日に花火を見ているなんて！時間が本当に早く過ぎてしまって寂しいと思った。留学生生活を振り返ったら、'小さいが確実な幸福'という単語が浮かんだ。大きいことをして得る幸福ではなく、小さいが確実な幸福を得るのもいいという意味だ。最近韓国で流行している単語である。かえりみたら、私は神戸女学院でどのように幸福で毎日楽しかった。例えば、起きたらテニス部の練習の音が聞こえた時、図書館の近くにいた猫が食べ物を食べている姿を見た時、他の交換留学生たちと料理をしながらつまらない話をした時、先生が'オさんすごいですね'と褒めてくれた時など。小さなことにも私は'ラッキー'とすごく喜んだ。このように何でもないことに幸せだった理由は周りの人と環境が良かったからだと思う。神戸女学院で会った人たちは皆親切で私のことをよく助けてくれた。おかげさまで安心して幸せに暮らせた。もう他の国の交換留学生たちや先生方、猫に会えなくてちょっと悲しいが、私はこの4か月間、皆から前に進む力を得た。私も皆に小さいが確実な幸福を抱かせる存在だったらいいなと思う。後悔のない留学生生活を作ってくれた皆に感謝したい。

まるで夢のような経験をありがとう

イーストアングリア大学交換留学生

初めて日本に来た日、満開の桜の下で、その時はそうなるとは知らなかった今の親友とコンビニで買ったお昼ご飯を食べました。暖かい陽光で、まだ寒かったイギリスから着てきたジャケットを脱いで、柔らかな草の上でしゃべったりのんびりしました。キャンパスにいただけで安心を感じました。

次の日、時差ボケで疲れてとても緊張していましたが、友達と市役所に行きました。イギリスと全然違う日本は怖くて、道によく迷いましたが、友だちと一緒にいさえすれば大丈夫だと思いました。

1か月が経ちました。早起きは苦手でしたが、午前6時に寮から一人で出て、職員さんに描いていただいた地図を手に、子どもの時からあこがれていた鳥取県の北栄町へ旅行に行きました。

6月の中旬には部屋が激しく揺れて、起きました。立ってみると一番恐れていた地震だと気が付きました。家族と離れて、一人で泣いていた私のドアを「トントン」と叩いてくれる音を聞きました。一人だと感じていても、一人ではありませんでした。

8月です。個人の悲劇、大雨、猛暑や台風を体験しましたが、私は毎日笑顔でいられました。日本の冒険はいっぱいあり、恐怖はあと一つだけ、飛行機でした。でも、もう一人ではありませんでした。皆さんのおかげで、空港まで安心して行けました。初めて来た日に会った親友と空港での別れは寂しくても、笑い合えました。

皆さんのご支援や一生忘れられない経験をありがとうございました。

忘れられない半年

文藻外語大学交換留学生

今年の4月から7月まで、神戸女学院大学で交換留学をしていました。日本語を精進しようと思っ、神戸女学院を選びました。

初めてキャンパスを見たとき、桜花爛漫の景色に魅せられました。今でもはっきり記憶に残っています。自然に囲まれたキャンパスは四季によって模様が違います。こんなに見飽きなくて美しいところで勉強したり、暮らしたりできて幸せでした。また、初めて親から離れ、外国で暮らすことに最初はちょっと不安でしたが、素敵な国際交流センターの方々、学生寮の先生方、Buddy たちはいつも親切にしてくれて、私が知らないことや悩んでいることがあればたくさん助けてくれました。いろいろお世話になりました。

最初は日本語ばかりの授業になれるのは難しかったですが、大好きな日本語なので頑張りました。一番好きな授業は「Introduction to Japanese Culture」という授業です。茶道や生け花など日本伝統文化を体験しながらいっぱい学びました。半年が経って、日本語の授業にも慣れ、日本語の上達も感じられました。また、一番感動的なのは、違う国籍の人々と出会ったことです。国籍、母語、皮膚の色はそれぞれ違うけれども、皆さん、一生懸命に自分の学んだ日本語で話したり、自分の思いを伝えたりします。留学生の皆さんと勉強したり、遊んだりして、仲良くなりました。一緒に過ごした時間がいつも楽しかったです。

神戸女学院大学は、色々な人たちと出会って、思い出をいっぱい作った私にとっては大切なところです。機会があったら、またもう一度訪れたいです。これから貴重な経験を生かして、日本語の勉強を続けたいと思います。

日本への印象

揚州大学交換留学生

「光陰矢のごとし」というように、4か月の留学生活は知らず知らずのうちにあと1か月で終わりそうです。短い時間でしたが、いろんなことを体験し、いろんな人と出会ったことは、これからの長い人生にとって、素晴らしい経験になったと思います。

最も印象に残っているのは日本人の優しさと綺麗な風景です。初めて神戸女学院大学に来たことを今でも覚えています。接していただいた国際交流センターの方たちがとても親切でした。それは私の心の底にある不安感を少し和らげてくれました。

そして、たまに道に迷ってしまった時、近くにいる日本人に道を聞いたら、私の行きたいところまで連れて行ってくださることさえありました。日本人のそのような優しさに感動しました。そればかりではなく、公共の場所で秩序を重視することやゴミを厳格に分類することなどに対して、私は心の底から感心し、そして感動します。

日本の名所旧跡はよく保存されていて、自然の景観が守られているのも良いです。幸いにも、私たちが来た時はちょうど日本の桜シーズンでしたので、桜が満開の風景を満喫しました。そして、神戸、大阪、京都、奈良などいろんな所に行きました。とても楽しかったです。行きたいところがたくさんありますから、残りの時間を大切に、日本各地の風土と人情を感じたいと思います。

最後に、皆さんに感謝を表したいです。皆さん、大変お世話になりました。ありがとうございました。

<派遣留学報告>

ロックフォード大学

新たな学びと出会い

文学部 英文学科 4年生

ロックフォード大学での9ヶ月で私は沢山のひとと知り合うことができ、とても楽しい時間を過ごすことができました。政治学を専攻しましたが、政治に限らず様々な分野の授業を取りました。受講した授業の中で興味深かったのが色々な国の文化を比較する授業です。それぞれの国の歴史や文化によって政治体制の違いが顕著に表れていることが分かりとても興味深い授業でした。その他に心理学やヨガの授業など今まで全く学んだことのないものにも挑戦しました。学内では私が唯一の日本人だったので行った当初は不安が大きかったですが、イベントに積極的に参加したり知り合いに自分から話しかけたりすることを心掛け友達を沢山作ることができました。後期になってから新しいインターナショナルの学生と知り合い、そのときキルギスの友人ができてとても仲良くなりました。彼女がいてくれたお陰で留学生活がより充実したものになりました。帰国直前にはインターナショナルフードフェスティバルがあり、私は当日浴衣を着たり日本食としてサラダ巻きを作ったりして日本の文化を沢山のひとに紹介しました。留学は初めてではなかったのですがそれでも前回とは全く違い1人で何でもやらなければいけなかったので大変だと思うこともありましたが、それでも周りの人に恵まれ沢山の楽しい思い出を作って留学を終えることができました。この経験をこれからの人生の糧にして頑張りたいと思います。



フードフェスティバルにて

サムヒューストン大学

なんとかなるもんです ☺

文学部 英文学科 3年生

昨年8月から今年の5月まで、アメリカのテキサス州にあるサムヒューストン大学に派遣留学をしていました。大学のあるハンツビルはNASAなどで有名な大都市ヒューストンから車で1時間ほど北にのぼったところにあり、町全体が大学のような、小さいけれど誰もが顔見知りでとてもあたたかい雰囲気のある町でした。サムヒューストン大学では主に犯罪学を専攻し、音楽をマイナー専攻しました。音楽の授業はアメリカ人以外の学生も多く、最初からのしく授業をうけられました。犯罪学の授業では、警官、弁護士、刑務官になりたい人がほとんどで、そのような職業に就くためには市民権を持っていないといけないので、クラスメイトはアメリカ人ばかりで、しかもこの大学一番の人気の学部ということもあり、みんな学業に集中していて、最初は圧倒されてばかりで授業についていくどころではありませんでした。教科書を読んでも法律用語だらけで、普通の辞書では日本語訳は出てこないし、レポートも過去の犯罪事件のデータをまとめたりと、日本語でもやったことのないようなことをしなくてはならず、とても大変だったことを覚えています。でも留学期間が終わるころには、教科書も大切なところをかいつまんで読めるようになりましたし、レポートの書き方にも慣れ、余裕をもって他の学生と同じように授業をうけることができるようになっていました。焦る必要は全くなく、新しいことをやっているのだからできなくて当たり前と楽観的に考えて勉強できたことがよかったです。



疑似裁判の教室

イーストアングリア大学

目標を実現へ

文学部 英文学科 3年生

イーストアングリア大学に留学したいと思ったきっかけは本学の通訳・翻訳プログラムでした。このプログラムを通し、翻訳一特に文学翻訳そして詩の翻訳に興味を持つようになりました。留学先をどこにするか迷っていた時にイーストアングリア大学は翻訳系の授業が多くあることを知り、そこで“私は絶対この大学で翻訳を勉強したい”と思うようになり、目標に向かいIELTSなどにも真剣に立ち向かうようになりました。

向こうでは、初めての寮生活と自炊そして新しい環境での授業は多少不安がありました。徐々に生活リズムがつかめ気付いた時にはその不安は消えていました。授業や“Society”というサークル活動などを通して多くの友だちもでき、ホームシックを感じない環境で過ごすことができました。

授業では、翻訳理論と実践の両方を学ぶことができ、復学してからも通訳・翻訳プログラムやゼミでそれらを活かそうと思います。翻訳する上では文化を理解することも大切なのでコミュニケーション系の授業も取り、異文化をどのように理解し伝えるかということも学びました。

夢や目標があれば苦しいことや、大変なことは絶対に乗り越えることができると私は信じているので今回の派遣留学でも多くの困難を時には周りの人に助けをもらいながら達成することができました。自分の目標そして夢を実現するためにはたとえ困難なことでも挑戦することが大切なのだ今回の留学を通して学ぶことができました。



友だちの家でのBBQパーティーにて

<認定留学報告>

梨花女子大学

留学で得たもの

文学部 英文学科 3年生

私は2017年8月から2018年6月まで韓国の梨花女子大学に認定留学をしました。この留学生活で学んだことは多く、充実した11ヶ月間でした。授業では毎日午前中に留学生向けの韓国語の授業を履修し、午後は韓国語で東アジアの歴史や文化に関する講義などを受けました。授業以外ではサークルや遊びに行くなどして韓国語に触れる機会を作りました。徐々に聞き取りに自信がついてきたり、反対に言いたいことをうまく伝えられずもどかしく感じたこともありました。韓国の親戚や以前からの知人と韓国語で話せた時や、友人から前よりも上手くなったと褒められた時に語学力の伸びを実感しました。

また、語学力以外にも、留学中に会った様々な人との関わりを通して学んだこと、気づいたことが数多くあります。留学中は韓国人をはじめ、世界中から集まった留学生たちと関わる機会があり、その中で価値観の違いに衝突することや、意思疎通が上手いかなことなどに煩しく感じたこともありました。そういった経験から色々な考え方を受け入れようという姿勢が身につきました。

高校生の頃から興味があった韓国留学を実現させ、実りの多い留学生活を送ることができたのは周りの人々の支えがあってこそだということを強く感じています。素晴らしい機会を与えてくださった神戸女学院大学の皆様をはじめ、家族や応援してくれた友人、留学先で出会った人々など、留学に関わった全ての人に心から感謝しています。



韓国語の授業最終日

<語学研修報告>

カルフォルニア大学アーバイン校

夏期語学研修

文学部 英文学科 1年生

私は1か月間語学研修としてアメリカに行ってきました。アメリカに行く前は楽しみで仕方がなかった語学研修。実際、最初の1週間は地獄でした。周りの人がなにを話しているのかも分からない、質問されても上手く聞き取れずこの回答は本当に合っているのかも分からない、自分が英語で話していることが恥ずかしいとさえ感じていました。自分の英語力を目の当たりにしたのです。正直早く日本へ帰りたくてたまりませんでした。寂しさを埋めるために日本の友だちにメッセージを送ったりしていました。しかし、ふと我に返り、このままでは駄目だと思うようになったのです。まだまだできるはずと自分に言い聞かせて2週目からは、ホストファミリーに積極的に話しかけるようにし、異国のクラスメイトに声をかけ始めました。

SNSを交換して毎日やり取りをして楽しみながら英語を学んでいました。国によって価値観が違うことを当たり前だけどはじめて自分の肌で感じることで嬉しかったです。

語学研修で一番嬉しいことは自分の英語が通じた瞬間のように思います。聞きたい話したいと思いつけることが一番大切で、自分次第でどこまでも伸びることができる。今回の語学研修で学びました。ここで出会えた全ての経験をこれからの英語学習への強みとします。人生で一番濃厚な夏でした。そして何よりアメリカ行きに賛成してくれた父に感謝しています。後悔のないよう、残りの大学生活を一生懸命頑張りたいです。



UCIのパートナーと卒業式で記念写真

ヨーク大学

語学研修での成長

文学部 総合文化学科 2年生

今回、ヨーク大学への1カ月間の語学研修を通して英語はもちろん、挑戦することの大切さを学びました。また、この研修に参加するまで関わる機会があまりなかった他学科の学生とも年齢関係なく助け合い、仲を深めることができいい経験になりました。最初は間違えることの恐怖から自分から積極的に答えることができずにいました。毎週火曜と木曜の午後に中国人留学生たちと一緒に受けていたセミナーでは周りの学生たちが自分の意見を積極的に流暢な英語で伝えている環境になかなか慣れることができず消極的になってしまうこともありました。先生や周りの留学生たちは私の意見を聞き理解しようとたくさん話しかけてくれることでセミナーの時間がとても楽しみになりました。お互いの母国語や文化を教えあい、宿題を一緒にして私がいけないところがあると理解するまで諦めずに教えてくれたことで私自身英語を話すことへの消極的な態度が出る機会が前よりは減り、自分から英語に触れる機会を増やしていくようになりました。日本が懐かしくなることもありました。1カ月間楽しく刺激的に過ごすことができました。私にとって語学研修は、自分自身の価値観や英語を勉強する姿勢が大きく変わった機会だったと思います。日本では当たり前だと思っていたことが当たり前ではなく人によって様々な考え方があること、自分から挑戦しようと試みる積極的な態度が大切だと学びました。



CNタワーでの集合写真

西オーストラリア大学

Aussie Style

文学部 総合文化学科 2年生

今回の西オーストラリア大学夏期留学は私にとって人生の大きな分岐点ともなりました。日本では滅多に外出しない生活を送っていた私が、1ヶ月間ほぼ毎日外へ足を運び、多くの出会いをすることができました。

UWA CELTの特徴は日本だけではなく、コロンビア・台湾・中国・韓国など、本当に様々な国の人たちと友だちになることができました。友だちと放課後に夕食や買い物へ行ったり、一緒にパース市内を観光したりしました。週末には、1日かけて遊びに行ったり、世界遺産であるピナクルズとランセリン砂丘へ観光に行ったりしました。街中でも、電車・バスでも語学学校でもたくさんの異なる国の人たちに会うことができました。地図の中で見ていた国の人たちと話すことができ、コロンビアの文化、台湾や韓国の色々な話を聞くことができました。パース市内に行けば、韓国・中国・日本・台湾のアジア料理店のみならず、ギリシャ・イタリア・インドなど本当に様々な種類の料理店があり、メニューを見るのさえも楽しかったです。また、スーパーマーケットに行くのが、放課後の楽しみでした。車やバス1つ乗るだけや、スーパーで買い物したりなど言語が違うことで本当に苦戦すると感じる時が多々ありました。治安も良く、色んな場面で気持ちの良い親切な対応をしてもらい、日本人として私もそうありたいと思いました。今でもSNSを通じて韓国の友だちやコロンビアの友だちと連絡をとっています。



先住民アポリジニの方の料理教室

フランシュコンテ大学

フランス語以外の学び

文学部 英文学科 2年生

1カ月間フランスに滞在して勉強はもちろんだが、知らない土地で様々な国籍の人と関わり生活をしたことで大きく成長できた。当たり前だがクラスメイトの年齢・国籍、学ぶ理由も人それぞれ違っていた。しかし、私たち日本人と大きく違うと感じたことは「とても積極的である」ということと、「英語は話せて当たり前である」ということだ。彼らは、授業中言いたいことがあると文法関係なく話し、先生に必死に伝えていた。加えて、何語を話すかという自己紹介があったが、母国語プラス英語は話せて当たり前で、フランス語を4、5か国語目として学びに来ている人さえいた。英語は本当に世界共通語ということを身に染みて感じたし、今まで以上に英語を話せるようになりたいと強く思った。10年近く勉強しているのになぜ話せないのか、でも私はフランス語を学びに来ているはずなのに…と複雑な気持ちになった。私が英語を流暢に話せたらフランス語では伝えきれないことも話せたのかな、もっと自分から話しかけることができたのかなと少し悔しかった。でも、フランス語も英語もあまり話せなかった私とも色んな人が話をしてくれて感謝の気持ちでいっぱいだった。最初は分からないことばかりで本当に不安しかなかったが、たくさんの人のおかげで楽しく充実した1カ月を過ごすことができた。今後も様々なことに挑戦していきたい。

貴重な経験を与えてくださりありがとうございます。



クラスメイトと（中央は先生）

昭和ボストン大学

昭和ボストン研修を終えて

文学部 総合文化学科 2年生

私は1カ月間アメリカにある昭和ボストン大学で food management について学びました。昭和ボストンの授業は1日に3種類の授業がおこなわれ、1限目には会話の授業があります。先生から出されたお題に対して自分の考えを英語で書くこともあれば、アメリカ文化に関する文献を読んで問題を解くこともあります。2限目には自分が選んだフォーカスグループに分かれ、各分野の単語の勉強や、関連する文献を読んで問題を解きます。また、3限目におこなわれるフィールドトリップについて学んだことを話し合い、理解を深めます。3限目は専門分野について、さらに深く学びます。通訳の方がいますが、学ぶ内容が難しいので自分で調べて内容を理解しました。フィールドトリップと授業の2つで構成され、主に food safety について学びました。フィールドトリップでは kosher 専用のキッチンや食安全の管理をしている会社の見学、その他、アメリカで有名なレストラン、テレビのキッチンスタジオの見学をしました。宗教別食習慣やアメリカの料理番組でされている工夫、食品の安全管理や流通について学びました。

週末や授業の後は、シャトルバスに乗って市街を観光しました。またカナダやNYにも行きました。

今回のボストン研修では、現地のスタッフや先生だけが英語を話すので、英語を使う機会は少ないです。英語の上達には向かない場所ですが、専門分野やアメリカ文化について深く学べたことは自分にとってとても価値のある経験になったと思います。



オプションツアー（NY）

< ACUCA Student Camp >

ACUCA Student Campに参加して感じたこと

文学部 英文学科 1年生

私は、2018年10月10日からの4日間、タイキリスト教大学でおこなわれた ACUCA Student Camp に参加しました。このキャンプでは、昼に学びの時をもち、テーマに沿ったディスカッションやプレゼンテーションをおこない、夜には異文化交流として、各国が文化紹介をおこないました。伝統的な踊りやゲームを披露し合い、各国の文化を楽しみました。

今回のキャンプを通じて、英語を使い議論し、自分の意見に反論されてもなぜそう考えるのか説明できるくらいになっていなければならないと感じました。このような場において、英語は話せて当たり前であり、その上で、自分の意見をしっかり持つことの大切さを学びました。今まで私はこういったプログラムに参加したことはなかったのですが、今回チャレンジしてみたことにより今の自分に欠けているものが一体何なのかということを具体的に考え見つけることができました。異文化交流の際には、各国からの生徒が代表となり自国を紹介するため、間違った文化などを紹介してはならない責任を感じました。日本を出ると私たちは、日本人として日本のことについてたくさん質問されたり、日本人はこういう人なんだというふうに見られることが多いです。他国の文化を理解しようとする姿勢も大切ですがそれと同じくらいもしくは、それ以上に自国について知ることが重要だと改めて痛感いたしました。今回、神戸女学院大学の代表として、参加させていただき大変貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。これからも今回での経験、反省を活かし、精進してまいります。



講義後のディスカッションを終えた時の様子

ACUCA Student Campで感じた世界のレベル

文学部 英文学科 1年生

今回私たちが参加した ACUCA Student Camp とは、アジアのキリスト教主義の学校の生徒が集まり、テーマに沿って意見を交わし、理解を深めるものです。今回は10月10日～14日にタイキリスト教大学で、「学生の人格成長にインターネットが与える影響：課題と解決策」というテーマでおこなわれました。初めに、テーマについての講義を受け、事前に準備していた自分の意見を発表・共有しました。次の日、午前、それら全てを踏まえて国や大学を超え、グループで議論し、午後、国単位で具体的な解決策を考え、発表しました。

今回最も印象に残ったのは様々な国、大学の人のグループディスカッションでした。初め、会話を聞き取ることで精一杯で、間髪入れず意見が飛び交う展開の速さに圧倒されましたが、誰も意見を尋ねてきてはくれないので、自分から会話に入らないといけません。明らかに英語力と論理的思考力が劣っていることを痛感しながら必死に意見を出すと、皆懸命に聞いてくれ、私の意見を褒めてくれたことが、嬉しく、自信もつきました。今回、今の自分の実力や世界のレベルを知りました。そして、英語はできて当たり前で、論理的、客観的、合理的に考える“Critical thinking”ができればいけないことを学びました。また、異なる国の人たちに刺激を受け、同じ日本人でも目標にしたい素敵な人に出会えました。他人の発表を見る機会や議論をおこなう機会が多く、様々なお手本が見られたこともいい勉強になりました。



浴衣を着て現地の学生と

音楽学部夏期講習会報告

2018年度音楽学部夏期講習会は、7月28日(土)～31日(火)の日程で開催されました。本学の音楽教育への取組を少しでも多くの皆さんに知っていただき、実際の指導現場を体験していただくことを目的として今年の講習会には台風12号の影響があったにも関わらず214名が申込み、本学の多彩な授業体験や、キャンパスの雰囲気を感じ取っていただく機会になったことと思います。



講習会のスケジュールは、器楽専攻、声楽専攻及びミュージック・クリエイション専攻については、聴音、楽典のテストと、各専攻教員による個人実技レッスンを実施しました。また松本薫平先生、周防彩子先生(いずれも声楽)、蜷川千佳先生(ピアノ伴奏)のミニコンサート、さらに、Xavier Luck先生(フルート)、岡田将先生(ピアノ)のミニコンサートに耳を傾ける楽しいひと時となりました。



また舞踊専攻はリズム・ソルフェージュ授業、そして教員陣による実技レッスン指導。また島崎徹先生のアドバイスタイム、さらに舞踊専攻生による「ショー・パフォーマンス」が披露されました。



(音楽学部事務長)

夏期インターンシップ実施報告

インターンシップは、学生にとって、実際の仕事や職場の状況を知り、自己の職業適性や職業生活設計など職業選択について深く考える契機となります。本学では、多くの企業や自治体・事業体のご協力を得て、キャリアセンターが学生に就業体験をおこなう機会を提供しています。

ひと口にインターンシッププログラムと言っても、営業同行のような形で実際に就業体験をするものから、グループワークなどを通じ課題に取り組み、プレゼンテーションをおこなうものまで、多種多様なプログラムがあります。学生は、自分の希望業界や体験したいプログラムに応じて、各種インターンシップに参加します。

この夏のインターンシップでは、以下の企業、自治体、団体の皆様のお世話になりました。記して、心より感謝の意を表します(かっこ内は受け入れてくださった本学学生数)。

西宮市(3名)、兵庫県経営者協会/兵庫県(1名)/神戸市(1名)、兵庫県雇用開発協会「女子学生のためのキャリアフォーラム2018」(2名)、姫路経営者協会/姫路ケーブルテレビ(1名)/姫路信用金庫(1名)/キンキテレコム(1名)/ベンハウス(1名)/マルアイ(1名)、和歌山県経営者協会/和歌山市(1名)/JAグループ和歌山(2名)、福井県経営者協会/野村證券 福井支店(1名)/福井新聞社(1名)、丹波市(1名)、徳島県(1名)、島根県(1名)、熊本県(1名)、宇土市(1名)、関西環境管理技術センター(2名)、三井住友海上火災保険(3名)、大阪シティ信用金庫(1名)、尼崎信用金庫(2名)、野村證券(10名)、JTB 神戸支店(1名)、名鉄観光サービス(1名)、日本旅行(2名)、アエラ地域文化デザイン室(1名) エブリブラン(1名)。

KCC/KC インターンシッププログラム/Japan America Society of Chicago(1名)、Anderson Japanese Gardens(1名)、Daikin Applied Americas(1名)、J.S.T. SALES AMERICA INC.(1名)。

学生のインターンシップに対する関心は高く、5月におこなわれたインターンシップガイダンスとインターンシップ選考対策講座①②には、合わせて864名の参加がありました。また、アメリカに学生を派遣するKCC/KC インターンシップの説明会、及び派遣学生による報告会にも、合わせて50名程度の学生が集まりました。

こうした熱心な要望に応え、今後とも、学生の精力的な活動を励まし続けたいと考えています。

(キャリアセンター)

<インターンシップ参加報告>**インターンシップ参加報告**

文学部 総合文化学科 3年生

8月上旬、三井住友海上火災保険株式会社で、5日間のインターンシップに参加しました。損害保険会社の仕事内容である、損害サポートや営業について、プレゼンテーションやロールプレイングを用いて実践形式で学ぶことができました。ワークをおこなう度に少しずつ自分の中に主体性が芽生え、変化を感じることができ、有意義な時間となりました。

また、最終プレゼンでは損害保険の未来を考えるワークをおこないました。これまで学んだことが活かせる内容となっており、やりがいを感じることができました。新しいものをつくり出すという課題は、とても難しく、はじめは本当に達成できるのか不安に思っていました。結果として、プレゼンテーション大会では優勝することができ、この5日間ともに頑張ってきた班のメンバーとの団結力を感じ、やりがいと達成感を得ることができました。

今回のインターンシップでは、毎日インターンシップ終了後に約1時間の内々定者との懇親会があり、内々定者からいただいたフィードバックで、自分では気づくことのできない自身の強み、弱みを知ることができました。その改善として何をおこなったら良いのかというアドバイスもいただくことができました。いただいたアドバイスを次の日の目標にすることで、少しずつ弱みを強みに変えていくことができました。今回のインターンシップで学んだ経験を、今後の就職活動に活かしていきたいと思えます。

KCC/KC インターンシップ

文学部 英文学科 3年生

アメリカのミネソタ州にある Daikin Applied Americas (DAA) でのインターンシップに実習生として1ヶ月の間、参加させていただきました。DAAの親会社であるダイキン工業は大阪ベースの空調メーカーで世界1位のシェアを誇っています。私は様々な業務をさせていただきましたが、中でも特に大変だったのはニューヨークにある関連会社とのテレフォンミーティングでした。私のリサーチトピックである空気質が会議の議題であったため、スーパーバイザーが、「せっかくの機会だから参加してみない?」と言ってくださいました。日本でもそんな経験をしたことがなかったためとても緊張しましたが、せっかくのチャンスだったので「ぜひ、参加したい!」と答えました。いざ参加してみると、社員の方々みなさまヒートアップして英語で、かつ専門用語が凄まじいスピードで飛び交い頭がパンクしそうになりましたが、なんとか参加しようと意見を述べました。経験豊富な方々に対して自分の考えを述べることはとても難しいことですが、いざ、一步を踏み出して発言してみると達成感がありました。

毎日が新鮮でチャレンジする日々でしたが、新しいことに挑戦することを恐れず楽しんでいました。最後になりましたが、このような素晴らしい機会をくださったKCC ボードメンバーや会員のみなさま、キャリアセンターの方々、先生方、受け入れてくださったDAAに心から感謝いたします。この経験を胸に、これからも様々なことに挑戦していきます。

2018年度大学教授会研修会報告

大学では毎年春と秋の2回、教授会研修会を開催し、大学教育の諸問題について学びあう機会としてあります。今年度は4月30日と10月11日、それぞれまる一日をかけておこなわれました。

春季教授会研修会は、「クローバーゼミ初年度の実践に学ぶ」と題して、2017年度始動新カリキュラムの中核科目である領域横断型ゼミの成果と課題を検証しました。この科目は、全学科1年生（音楽学科は2年生）と全学科教員が、ゼミ形式でひとつのテーマを追求するというもので、本学のリベラルアーツ教育の理念を体現した新科目です。研修会午前中は、総論に引き続き、昨年度授業担当教員のうち4名が、それぞれのクラスの授業実践の工夫について報告くださり、午後は小グループで討議しました。専任教員72名、大学・法人職員17名が参加しました。

秋季教授会研修会は、「学生支援・相談体制の再構築：専門支援職員の職能の理解と教・職チームワークづくりに向けて」をテーマに開催しました。午前中は、まず京都大学学生総合支援センター 船越高樹先生のご講演「教育の質保証と合理的配慮の大学における現状～成績評価とテクニカルスタンダードについて～」をうかがい、学生支援の最先端の事情を学びました。さらに本学で今年度導入された新しい支援体制について、学生支援アドバイザー、カウンセリングルーム専任カウンセラー、学生生活支援センター専門職員の皆さんから報告をいただき、現状を共有しました。研修会の午後は小グループに分かれて、模擬事例をもとに、支援を必要とする学生への対応と教職連携の方法を検討し、船越先生からアドバイスをいただきました。参加人数は大学教員63名、大学・法人職員21名でした。

今年度の研修会は春季・秋季とも、日々の教育活動や学生対応にそのまま直結する、たいへん実践的な学びの場となりました。会の準備にご尽力くださった皆さまに、心よりお礼申し上げます。

(FDセンターディレクター)

2018年度岡田山祭「花蝶風月」

大学祭実行委員長

「花蝶風月」をテーマに掲げた2018年岡田山祭は、両日とも天候に恵まれ盛会のうちに終えることができ大変嬉しく思います。今年のテーマは学生一人一人が違う“花”を咲かせ、“蝶”のように羽ばたき、“月”のように輝けるようにと願いを込めました。また、私たちの大好きな大学を多くの方々に知っていただきたいと今年初のキャンパスツアーも企画しました。当日は多くのお客様に来場していただき、楽しんでいらっしやる姿や素敵な笑顔をした学生の姿を見て、実行委員一同達成感を感じた2日間となりました。多くの方々に新たな神戸女学院の魅力を伝えられたのではないかと思っております。トークショーやファッションショーのゲストの方も「素敵な大学ですね。」と褒めてくださいました。少しの時間でしたが神戸女学院の雰囲気を感じていただけたように思います。

委員長という立場に立ってたくさんのプレッシャーや困難がありました。悩みや悲しみ、喜びなどを共にし、たくさん話し合っただけで常々に支えてくれた実行委員には感謝の気持ちでいっぱいです。またこの大学祭を開催するにあたりご支援ご協力賜りました学内外全ての皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

来年は裏方で活躍してくれた後輩が岡田山祭を今年以上のものに作り上げてくれることと思います。来年もぜひ岡田山祭にお越しください。



大学祭初日の大学祭実行委員

大学クローバー賞授賞式

秋晴れのもと、岡田山祭のオープニング（10月26日）に大学クローバー賞の表彰式が執りおこなわれました。大学クローバー賞とは神戸女学院大学に在籍する学生の課外活動を奨励することを目的とし、顕著な活動や成績を取めた団体または個人にその栄誉を称えて贈られる賞です。選考は10月3日開催の連絡協議会において「課外活動報告書」に基づき、連絡協議会委員9名と大学学生自治会委員4名の投票によりおこなわれました。

今年度の受賞はスカッシュラケット部・ラクロス部・ダンス部 (Dance Lovers)・チアリーディング部 (VENUS)・コーラス部・お料理研究部の6団体でした。中でもスカッシュラケット部は3年ぶり16回目の返り咲き受賞、また、コーラス部とラクロス部は13年連続16回目の受賞となり、日々の熱心な活動が連続受賞へとつながる結果となりました。

表彰式は、浦邊めぐみ会会長、小坂体育部顧問、吉田自治会長、高見自治会体育部長、京藤自治会文化部長同席のもと、白井学生副部長の司会で始まり、中野学生部長から受賞団体の発表の後、斉藤学長より各団体へ表彰状と賞金が授与されると、会場は受賞を称える拍手に包まれました。

今回受賞した団体も、今年度は惜しくも受賞を逃した団体も、今後の更なる活躍を期待したいと思います。

(学生生活支援センター課長)



表彰式を終えて華やく受賞団体のみなさん

2018年度めぐみ会賞

めぐみ会では、大学生及び中高部生徒の自主的な活動を奨励するため、神戸女学院の立学の精神にふさわしい課外活動をおこなっている団体を対象とした「めぐみ会賞」を設けています。

本年度の受賞団体は「コーラス部」と「チアリーディング部」です。「コーラス部」は、活発な活動、特にチャペルアワーやクリスマス祝会でのご奉仕、また大学入学式において、新入生に学院歌の歌唱指導をされていること。「チアリーディング部」は、大学祭、バザーなど学院行事への積極的な参加、障がい者支援施設でのパフォーマンス、また自分たちのパフォーマンスだけでなく裏方としても活躍されていることなどが、主な受賞理由です。

10月26日、岡田山祭のオープニングで、めぐみ会会長より受賞団体へ表彰状と賞金の授与がおこなわれました。今年の岡田山祭のテーマは「花蝶風月」。自然豊かで美しい校舎のある神戸女学院で、花のように美しくあでやかに、蝶のように優雅に自由に舞ってほしいとメッセージを贈りました。

なお2017年度中高部受賞団体は「雫の会」と「春の子ども会」でした。2018年度に関しては1月に選考・表彰いたします。「めぐみ会賞」はクラブや同好会だけではなく、小さなグループも対象になります。来年度も多くの応募をお待ちしております。

(公益社団法人神戸女学院めぐみ会 副会長)



大学祭にて浦邊会長より授与

<私の研究>

知的障害のある人の自己決定支援

與那嶺 司



現在、私は「知的障害のある人の自己決定支援」という研究テーマに取り組んでいます。ここ数年、この社会福祉実践・研究領域では、「自己決定」よりも「意思決定」という言葉がよく使われるようになりました。この「意思決定」

という言葉は、「自己決定」が、実際のところ、他者との相互作用の中で本人の意思が確立していくプロセスであることを表現しているとされます。「自己」だけで完結しない、さらに言うと、「自己」だけでは完結できない行為が自己決定であるとの理解です。

ですので、私の研究も「知的障害のある人の『意思決定』支援」と言ったほうがよいのかもしれませんが。ただ一方で、「自己」が消えた「意思決定」という言葉が広がることに、若干の違和感を持っています。他者との相互作用の中で自己決定がなされることに疑いの余地はありませんが、それであっても、その主体は本人である「自己」に当然あるはずですが。にもかかわらず、他者との相互作用であるがゆえに、「自分のことは自分で決める」という知的障害のある人本人の視点が軽視されてしまうのではないかと不安を抱いているからです。決定の主体はどこにあるのか。この点について、少しこだわってみましたと思うのです。

そこで、私の研究テーマを語る時、「意思決定」支援ではなく、今でも「自己決定」支援という言葉を使っています。具体的には、知的障害のある人の自己決定がどのようになされていて、また、どのようにすればその支援がうまくいくのかといった点について、質問紙を活用した量的調査、そして聞き取りを中心とした質的調査をもとに研究に取り組んでいます。それにより、知的障害のある人のQOL（生活の質）を高める福祉的支援のあり方を明らかにしたいと考えています。

(総合文化学科教授)

歌うことは自然なこと

山田 愛子



いろいろなご縁が結び付き、私は“歌うこと”と共に人生を歩ませていただいております。

幼い頃は、決して人前に出ていくようなタイプの子でもなかった私が、今では舞台でひとりで歌う仕事をしているのですから、人生は不思議

なものだと思います。

声楽の一番の魅力は、やはり世界にひとつしかない楽器である、ひとりひとりに与えられた身体を使って歌われるということでしょうか。声楽の勉強を始めればすぐに、オペラ歌手のような声が出るわけではなく、まずは楽器である自分の身体と向き合い、声を磨いていくところから声楽の道は始まります。自分の表現したい心を歌うテクニックを身につけるために、歌い手は日々、自分の声と向き合い、練習を重ねます。まさにアスリート！（スポーツ選手の書かれた本を読み参考にすることもあります。）瞬間芸術である音楽は、舞台上で一度出た“音”を消すことができません。その瞬間、その舞台上でベストのパフォーマンスができるよう、身体と精神面を良いコンディションに持っていくことが必要となります。

「息の芸術」と言われる声楽。コントロールされた息にのせて歌われる歌が、人の心に触れることができるのではないかと思います。人間、誰もが自然とおこなっている呼吸。「歌うことは自然なこと」。このシンプルで自然なことへ行きつくまでがとても長い道のりなのですが、目指すのはここなのではないかと日々考えています。楽譜を読み、そこに書かれている音楽を心で感じ、歌声にしていく中で、自分の心と息の流れの歯車がうまく回りだした時、身体が解放されるような感覚を持つことがあります。

歌を通して、人の心と心が近づき、開かれた心が閉ざされることなく、共に響き合う時を持てることを願いつつ、歌と向き合いこれからも歩んでまいります。

(音楽学科専任講師)

<ゼミ紹介>

「ビジネスの世界」への扉

FUKUSHIMA Marcelo

グローバル・ビジネスゼミは、複雑で常に変化するビジネス界や国際経済をテーマに、学生が「グローバル・マーケティング」や「海外直接投資」などを深く考える初めての機会です。就職活動を意識し始める時期になりますと、学生はビジネスの仕組みや企業活動に興味をもつようになり、近い将来その未知の業界に入るかもしれないという期待感と不安に包まれた自分像が見えてきます。研究をしているうちにビジネスの面白さに目覚めると「消費者」ではなく「企業」の目で周りの世界を見るようになってきます。私たちのゼミは学生によって成立するものです。学生自ら研究し、議論し、自分の頭で考えて結論に至るというプロセスを経て「すべてを疑問に思う」という姿勢を意識しています。ゼミでの教育は「知識」、「スキル」そして「姿勢」の3つの次元に分かれます。「知識」は学問の基礎的及び体系的知識を身に着けることをいいます。「スキル」は論理的思考、発表力、コミュニケーション能力、情報をまとめる能力などのことをいいます。そして「姿勢」は責任をもって研究し、正確に情報を扱い、科学的倫理に基づいて行動をすることをいいます。しかし、勉強だけでなく大学祭の模擬店やゼミ旅行などで仲間意識を高めて楽しい時間も過ごしています。学生にいろいろ苦勞も掛けることがあります。20頁の英文論文を書くという過酷な試練を成し遂げた姿を見ますととても誇らしく思います。

(英文学科准教授)



岡田山祭の模擬店

食品成分の抗酸化性を評価する

寺嶋 正明

「活性酸素」と呼ばれる物質が生活習慣病に関係している証拠が多数報告されています。「活性酸素」とは他の物質を酸化する力が特に強い分子で、体を構成する成分（生体成分）には「活性酸素」によって酸化されると機能を果たせなくなるものがあります。本来、人間の体には細胞内で発生する「活性酸素」を無害化する仕組みが備わっていますが、食べ物は生体成分の酸化を防ぐ働きをする物質を含み、健康の維持に貢献しています。そこで、食品が持つ抗酸化性（生体成分が酸化されることを防ぐ力）を合理的に評価することが重要な課題となりますが、標準的な抗酸化性評価法は未だに確立されていません。「活性酸素」には多くの種類があり、それぞれ酸化する力が異なること、対象となる生体成分は無数にあること、食品中の抗酸化性を示す物質には非常に多くの種類があることなどがその理由です。

私のゼミでは2005年にミオグロビンというタンパク質の構造変化を指標とする独自の抗酸化性評価法を開発し、種々の抗酸化性物質、味噌、野菜、鶏肉消化物、アミノ酸、ペプチドなどが示す抗酸化性を合理的に評価できることを実証し、論文発表してきました。これらは学生たちと一緒に研究した成果です。学生は数人でグループを組み、一つの研究テーマに取り組んでいます。3年生後期に実験方法の習得から始めますが、4年生の卒論発表会では多くのグループが興味深い研究成果をあげています。

(環境・バイオサイエンス学科教授)



卒業研究に取り組む学生たち

<課外活動紹介>

[クラブ]

草月流華道部

部長

草月流華道部の活動

草月流華道部員は20名で、毎週月曜日にクローバー館で活動しております。お稽古には師範の先生の指導の元、初心者の方も基礎から学ぶことができます。

最初は草月流の基本花型から学びます。その後、自由花型（お花を自分の好きなように生けること）ができます。卒業までにお免状をいただくことを目標に、部員全員が一生懸命にお稽古に取り組んでおります。お稽古が終わると、あたたかい紅茶とお菓子をいただきながら、先生と部員のみんで談笑し、和やかな雰囲気でお稽古をおこなっております。また留学生の方も入部していただき、華道のお稽古を通して、華道の精神や日本の伝統文化を学んでいただきました。

草月流華道部は1年を通して愛校バザーと大学祭を中心に活動しております。愛好バザーでは、部員が手作りでプリザーブドフラワーを販売し、毎年來校者の方々に大変人気で、喜んでいただきました。また大学祭では、部員全員が生花作品を展示し、4年生は卒業制作として大作を生けております。

華道部では普段忙しく生活しているなかでも、リラックスしてお花を生けることができます。またお花の美しさに触れることによってリフレッシュし、部員全員がお花を大好きになり、お花の名前にも詳しくなりました。また生け花のルールを学ぶことにより、礼儀作法が身につきます。生け花に少しでも興味のある方は体験にいらっしゃってください。



2018年度 岡田山祭

[クラブ]

フットサル部 KC. vivace

前主将

私たち神戸女学院大学フットサル部は、3学年総勢26名で活動をしています。フットボールを経験したことのある部員は現在部内で3人おりますが、その他の部員は大学からフットサルを始めたメンバーです。練習内容といたしましては、ボールタッチから対人練習まで幅広く練習しており、フットサルを始めたばかりのメンバーたちがしっかりと土台作りができるように、基礎練習に重点を置いて日々練習に励み、部員同士でどのような練習やどの技術を磨いていきたいのかを話し合ってそれを実現できるようなメニューを考え、実行しながら活動しております。外部の大会にも出場し、関西大会まで駒を進め、年に4回開催される部内の大会で白熱した試合を繰り返しています。その中の2回の部内大会は、毎年長期休暇中の夏合宿と春合宿の間におこなわれます。フットサル漬けの2日間を過ごすことで部内での足りない部分などの課題が見えてきたり、寝食をともにすることによって部員同士の仲もより深いものとなっていると感じております。

今後も主体的に活動をしつつ、互いに刺激し合いながら高めあっていけるような部活でありたいと思います。また、私たちの部活は途中から入部してくれる新入部員もいるアットホームな部活ですので、少しでも興味のある神戸女学院生には一度活動をのぞいてみてほしいと思います。



第三体育館にて、集合写真

中高部報告

高校選手権に出場して

高等学部 2年生

7月29日(日)に、第40回全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会C級の部に参加しました。毎年1回おこなわれる、全国の高校生がかかるたの聖地、滋賀県近江神宮周辺に集まって戦う大会です。1試合目は運良く不戦勝、2、3試合目も順調に勝ち上がりましたが、4試合目は今までで一番だと思えるほど厳しい試合でした。終始劣勢で5、6枚の差が一向に埋まらず、肝心なところでお手つきもしてしまうなど今考えても苦しくなるような状況でしたが、何度も頭を襲ってくるもう無理だなという思いを必死に振り払い、2枚差でなんとか勝つことができました。その試合までは人数が多く地元の公民館でおこなわれていましたが、準決勝、決勝は近江勸学館に移動しておこなわれました。特に決勝は、浦安の間という名人戦、クイーン戦で使われるような普段はめったに試合することのできない貴重な場所であるたをとることができ、本当に幸せに思います。最後の2試合はそんなに記憶に残っていませんが、気持ち良くとることができました。C級は10組に分かれており、計10人が優勝し、その試合で各4位までの40人がB級に昇級しました。入部したての頃からずっと憧れの存在だったB級に入ることができ、優勝もできて嬉しさでいっぱいです。次はA級に向けて、精進していきたいと思います。最後になりましたが、夜遅くまで残って応援してくださったみなさん本当にありがとうございました。

スポーツチャンバラの全日本大会で

中学部 1年生

私は8月19日(日)に横浜文化体育館であったスポーツチャンバラ第44回全日本選手権大会に参加しました。1年に1回の大会で大阪の選手は中学生以上しか出られない大会なので、今年、初めて参加しました。6時半頃の新幹線に乗り日帰りで行ったのですが、今までの練習の成果がこの日1日で終わってしまうと思うと緊張して、横浜に着くのが怖かったです。試合は「基本動作」という型から始まって、部内種目(小太刀・長剣・二刀)の中から1つ、部外種目(盾小太刀・盾長剣・両手長剣など)から1つ選んで出場します。私は、基本動作、小太刀、盾小太刀に出場しました。基本動作で大会の感覚を取り戻して小太刀にのぞみました。周りはほとんど大学生で中学生は数人しかいませんでした。1回戦、2回戦は負けたくないという気持ちが強く、少し消極的な試合運びをしましたが、どんどん勝ち進み準決勝まで行くと、負けても3位の入賞が決まったという安心感でリラックスして戦えました。準決勝も無事に勝ち進み決勝戦。その他の試合は1分間に1本勝負ですが決勝戦は3分間3本勝負です。試合は、私が先に2本取って勝ちました。最後の最後で負けて準優勝という結果の悔しさを今までに何度も経験していたので勝てたときはとてもうれしかったです。

優勝できたときの達成感が私は大好きです。

私たちの団体戦

中学部 3年生

2018年、私たちJテニス部は、団体戦を通して、最高の思い出を得ることができました。まず、ダブルス3本勝負の冬の県大会です。お互いに声をかけ合いながら、無事に決勝まで進むことができました。決勝では、私たちがそれまで勝ったことがなかった雲雀丘学園中学と当たることになりました。最初に2つのペアが戦い、その2つのペアが戦い終わった時点で、1勝1敗でした。最後に残された試合は、とても接戦でしたが、見事勝利し、県大会優勝という輝かしい成績を取ることができました。そして、ダブルス2本シングルス3本の5本勝負の夏の県大会。準決勝を勝ち抜き、決勝で、冬の県大会で勝った雲雀丘学園中学と戦いました。結果は、残念ながら負けてしまいました。準優勝なので、県から2校選ばれる近畿総合体育大会に出場する資格を得ることができました。その近畿総合体育大会こそが、私たちの最後の団体戦です。それに向けて、汗を流しながら必死に練習しました。初戦は奈良学園登美ヶ丘中学と戦いました。シングルス最後の対戦は、タイブレークにも及んだ接戦の末、勝利することができました。2戦目は第1シードの浪速中学と当たり、善戦及ばず負けてしまいました。近畿ベスト8という素晴らしい結果で団体戦を締め括ることができ、今まで応援してくださった学校や友だち、そして家族に感謝する気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

2018年度中高部芸術鑑賞会

6月11日(月)、西宮アミティホールにて、今年度の芸術鑑賞会として、和太鼓の2団体と津軽三味線の若手3人による演奏を鑑賞しました。

本来こうした和楽器の演奏は講堂のような規模のホールで生の繊細な音を味わうべきかもしれませんが、今回は、体育祭が終わって間もない時期の設定だったこともあり、あえて皆が熱く一体感を得られるような、いわゆる「祭」を意識した舞台としました。

300年の伝統をもつ「大治太鼓尾張一座」による神楽太鼓のエネルギッシュでかつ華麗な演奏で始まり、続いて20代の若者3名による津軽三味線ユニットの「三絃士」、そして創作和太鼓集団「転輪太鼓」はプロジェクトンマッピングを背景にした殺陣や群舞的なパチさばきなど、視覚効果も満載の迫力ある演奏でした。また、その3団体のコラボレーションによる演奏は、どこか「異種格闘技戦」を思わせるような激しいものでした。

会場全体が大いに盛り上がった約2時間のプログラムでしたが、そのライブ会場のような興奮は、確かに「芸術鑑賞」としては、違和感があったかもしれません。しかし、古来からの楽器のもつ身体性とそこから生み出される躍動感は、電子音など機械を介在として「つくられた音」に慣れ親しんだ私たちにとって、とても新鮮で、力強く心を揺さぶられたのではないのでしょうか。

(中高部視聴覚委員会)

S 校内大会

2018年度のS校内大会は、1学期期末試験終了後の7月9日(月)におこなわれました。種目はソフトボール、バレーボール、バスケットボール、卓球、リレーの5種目で、体育祭の縦割りとは違い全学年クラス対抗戦で試合がおこなわれます。体育祭では学年を越えて、上級生と下級生が協力して組ごとにレースをおこないますが、校内大会では上級生も下級生も同学年の他クラスもライバルとなるので、先輩に食らいつく後輩の勢いを、どう先輩が返り討ちにするのか、起きてはならない下剋上が起こってしまうのか、毎年どの種目も白熱した好ゲームが繰り広げられます。

今年はS3Bの活躍が目立ちましたが、バスケットボールとリレー種目でS1とS2が入賞し、総合ではS2が2クラス入賞しました。

最後は勝者も敗者もお互いを称えあい、涙と感動の思い出に残る1日となりました。

総合

1位S3B 2位S2C 3位S2A

ブービー賞

S2B

ソフトボール

1位S3A 2位S3B 3位S2A

バレーボール

1位S3B 2位S2B 3位S3C

バスケットボール

1位S3B 2位S1B 3位S2C

卓球

1位S2A 2位S2C 3位S3C

リレー

1位S2C 2位S1A 3位S1B

(S体育部顧問)

J 校内大会

7月11日(水)、大雨警報発令のため期末試験期間が延び、開催が危ぶまれましたが、無事晴天のもと予定通りにJ校内大会を実行することができました。リレー及び球技3種目の総得点を競うクラス対抗の大会です。午前中にリレー予選、各球技予選リーグをおこない、午後は球技決勝リーグ、最後にリレー決勝をおこないました。どのクラスも一生懸命で、予選リーグから熾烈な戦いが繰り広げられました。結果は以下の通りで、J3が上位3位を独占しました。上級生の強さが際立ちましたが、下級生も決勝トーナメントに多く進み、上位に食い込む健闘が見られました。

1学期の終わり、新しいクラスにも慣れてきた頃の今大会で、それぞれが競技や応援に力を注ぎ、熱気に包まれた一日でした。

総合

1位J3B 2位J3A 3位J3C

ブービー賞

J1B

リレー

1位J3B 2位J2A 3位J3C

ドッジボールa

1位J3B 2位J3C 3位J2A

ドッジボールb

1位J3A 2位J3B 3位J2B

ポートボール

1位J3A 2位J2A 3位J3B

卓球

1位J3C 2位J3A 3位J3B

(J体育部顧問)

米加田先生との出会い

高等学部 2年生

6月16日(土)、私たちSの生徒12名は先生方2名に引率していただき釜ヶ崎へ炊き出しに行きました。釜ヶ崎は大阪にある西成という区を指す言葉で、あいりん地区と呼ばれることもあります。ここは日雇い労働者の街で、所謂「ホームレス」と定義される方々が多く住んでいます。私たちはおにぎりとスープを作り、いこい食堂のすぐ向かいに位置する四角公園でそれらを配りました。いこい食堂の米加田先生は、食料をととても大切に使われました。私も人並みには食べ物に感謝をしてきたつもりでしたが、ここまで「食べ物を無駄にしないこと」に神経を集中させたのは初めてでした。手についた米粒を水で取って集めると、小さな玉くらいにはなりません。10人近くが同じことをして米粒を集めれば、手のひら大のおにぎり一つ作れます。徹底的に食料の無駄を減らす。米加田先生にとっては当たり前のことだったのだと思いますが、私にとっては小さな衝撃で、食のありがたみを再確認する機会となりました。炊き出し後の語らいの場で、米加田先生は「人と出会うというのは自分が変わるということだ」と仰いました。私たちは釜ヶ崎のこれからと、それらを操作する身の周りの政治について考えていかなければなりません。まずは狭い範囲で良いから何かに興味を持つこと。そしてそれを掘り下げること。人と関わって自分の価値観を確立させていくこと。米加田先生のメッセージを実行できる人間でありたいと願います。

夏の修養会 広島訪問報告

7月30日(月)から8月1日(水)の日程で、修養会・広島訪問を実施いたしました。参加者はJの生徒10名、Sの生徒8名、教員4名でした。

今年度から、証言を聞くことを共通のテーマとして、長島愛生園への訪問プログラムと併せる形で実施する予定でしたが、台風の影響で1日目の長島訪問は中止となりました。

広島訪問のプログラムの柱は、広島女学院高等学校と金城学院高等学校の生徒たちとの交流プログラムです。1日目には、広島女学院を会場として使わせていただき、開会礼拝を共に守り、それぞれの視点から平和についてのプレゼンテーションをおこない、熱心に語り合いました。

また、宿舎では、被爆証言に耳を傾け、金城学院の生徒と共に語り合いの時と礼拝を共に守りました。

2日目は、広島女学院の生徒による慰霊碑巡りに続いて、核兵器廃絶を目指しての街頭署名活動をおこないました。炎天下での署名活動をおこないながら、生徒たちは「平和をつくり出す者は幸いである」という聖句を実践することの貴さと難しさを感じたことと思います。

この交流プログラムは、それぞれの地に建てられたキリスト教主義学校で学ぶ者として、「平和をつくり出すために、私には何ができるだろうか」と考えてもらうことを願いとしています。この大きな課題を持ち帰った生徒たちが神戸女学院で学ぶ者として、自らの役割について考え、遣わされた場所で貴い使命を果たしてくれるものと心から期待しています。

(中高部教諭)

夏の修養会 白浜訪問

8月21日(火)、22日(水)、1泊2日で白浜バプテスト教会をJ3 5名、S1 8名、S2 11名で訪問しました。引率は3名です。今回で3年目となる白浜訪問です。白浜バプテスト教会の藤藪庸一牧師は教会の牧会をしながら、三段壁から身を投げようとした人などを中心に保護活動をおこなうため、NPO法人白浜レスキューネットワークを立ち上げ、代表を務めています。

今回の教会訪問では、神奈川県の登戸エクレシヤキリスト教会の青木靖牧師の団体と、愛知県の日本福祉大学の学生のボランティアが重なり、結果的にこの方たちと共に「コペル君」に参加させていただくことになりました。白浜の子どもたちは15名くらいでした。青木牧師の主導により、子どもたちと楽しく遊びました。夕食後、宿舎に藤藪先生や青木靖牧師にも来ていただき、生徒たちの質問にも答えていただきました。藤藪先生から真摯な答えをいただいて、感動して聞いていたようです。こんな風に信仰を支えとして他者のために何もかも捧げて生きている人がこの世の中にいるのだという、そのような驚きと感動だったようです。

2日目は藤藪先生が教員委員を務める白浜町立白浜中学校の教育支援活動に参加させていただきました。白浜中学校の3年生を対象とした補習に神戸女学院の生徒と、日本福祉大学の学生たちと一緒に参加しました。

(中高部教諭)

2018年度リーダーシップトレーニングキャンプ

7月23日(月)～25日(水)まで朝来市にある山東自然の家でリーダーシップトレーニングキャンプをおこないました。生徒50名と引率教員5名で参加しました。

1日目の炊事は予想通り火起こしに時間がかかり、夕方のプログラムを次の日に変更するなど臨機応変に対応しました。2日目の食事コンテストの時には食事の準備も慣れてきて時間的な余裕も感じました。

夜のミーティングではそれぞれ考えていることを出し合い、次の日への改善へとつなげることができました。教師陣も生徒たちとのミーティングとは別に話し合いを何度かもち、生徒への助言の仕方やプログラムの意義について意見を交換しました。

生徒が中心になっておこなったレクリエーションに教師も教師チームとして参加し、真剣に競い合い、楽しみました。学校を離れておこなったため、事前に様々なシミュレーションをしてから行くのですが、やはり思っていなかったことが起こり、その都度考え、判断しなければならぬ場面が多くありました。そういう時にとった判断について、もっとこうの方が良かったという反省をし、次の日に少し改善されているという繰り返しでした。キャンプの最中に全体的な成長が見られました。また、猛暑の中での野外炊爨さんに熱中症を心配しましたが、大きな事故もなく終えることができました。

(中高部教諭)

2018年度 第17回訪豪研修旅行報告

7月31日(火)から8月18日(土)の19日間、訪豪研修旅行に行っていました。参加生徒はS2が2名、S1が18名の合計20名。付き添い教員は2名。それに、今回付き添い教員が男性2名であることから、特別に女性添乗員2名(常時1名同行、途中交代)に全行程同行していただき、常時総勢23名で行動しました。

関西国際空港を7月31日(火)に出発して香港へ飛び、乗り換えて翌8月1日(水)ケアンズに到着。ここで2泊した後シドニーへ移動し1泊。8月4日(土)にパースに到着し、MLCでの研修とホームステイが始まりました。帰りは8月17日(金)にMLCを出発。深夜にパースを立ち、香港で乗り換えて8月18日(土)夕方に関西国際空港に戻りました。

香港ではストップオーバーを利用してミニ観光を入れ女人街、ビクトリアピークなどを訪れました。夕食には中華料理を美味しくいただきました。

深夜に香港を立ち、機中泊してケアンズに早朝に到着。朝食後、観光鉄道でキュランダの熱帯雨林へ向かい、水陸両用車で熱帯雨林の植物を観察して回ったり、ゴンドラで熱帯雨林を上から観察したりしました。夜には南半球の星空観察と野生のカンガルーの餌付け体験をしました。

ケアンズの2日目はグリーン島に渡り、グレートバリアリーフに棲む生き物たちをグラスボートで観察しました。

翌朝、ケアンズ空港からシドニーへ移動。シドニーではミセス・マコーリーズ・ポイント、セントメリー大聖堂などを見学。オペラハウスではバックステージツアーに参加し、夜はシドニー湾をクルーズしながらディナーをいただきました。

翌日は、最初にハーバーブリッジの途中まで歩いて渡って眺めを楽しんだあと、シドニー発祥の地ロックス地区を訪れました。

8月4日(土)夕方パースに到着しホームステイがスタート。6日(月)にMLCに初登校し、ペリー校長先生が歓迎のあいさつに来てくださいました。

MLCでは、MLCの先生によるESL、体育、音楽、美術、家庭科などの授業を受けたほか、アボリジナル・アート制作、ディジリドゥの演奏体験など、私

たちのために外部講師を招いて実施された授業もありました。

生徒たちは日本語のネイティブスピーカーとして、日本語を学ぶMLC生のお手伝いもしました。日本語会話の相手を務めたり、書道の練習を手伝ったり、日本の伝統的な遊びをMLC生と一緒にやったりしました。

訪豪研修旅行は異文化体験型研修旅行なので、授業以外に多くのエクスカッションも用意されています。1泊2日でマーガレット・リバー地区を訪れた時は、ニルギ・ケイブという鍾乳洞でアボリジニの伝説について学んだり、キャンプファイヤーでダンパを焼いて食べたり、マーガレット・リバーのチョコレート工場に寄ってお土産を買ったりしました。別の日には、スワン川をクルーズしてフリーマントルに行き、有名なフリーマントル・マーケットで食事や買い物を楽しみました。ピナクルズにも行き、その帰りにはランスリンという町の近くの砂丘でサンドボーディングを体験しました。最後のエクスカッションでは、カバシャム・ワイルドパークを訪れました。ここにはオーストラリア固有の動物がたくさん飼われているほか、羊の毛刈りショーなども観ました。ショーは参加型で、生徒たちも積極的に参加していました。帰路には、はちみつの館にも立ち寄りました。

MLC滞在最後の夜、寮の食堂でさよならパーティを催してくださいました。MLC生が日本語で送別のあいさつをしてくれた後、教員1名、S2の生徒2名が英語でお礼のことばを述べました。ホストファミリーごとに卓を囲んで会食を楽しみ、最後に生徒たちが「恋ダンス」を披露してMLCのみなさんに感謝の意を表しました。

8月17日(金)夕方MLCを出発。夕食の後、最後にパースの夜景を思い出に刻んで、パース国際空港から帰国の途につきました。

(訪豪研修旅行担当)

夏山登山

今年の夏山登山は、立山に登りました。参加者は生徒45名（J2～S3）、教員9名の54名と、現地ガイド1名、添乗員1名でした。

1日目はバスで移動し、立山室堂みくりが池温泉に宿泊、2日目朝より立山の縦走に出発しました。雄山～大汝山～真砂岳～別山を回る予定でしたが、雄山頂上までの道で複数の学校登山による渋滞に遭い大幅な遅れが生じたため、昼食後はエスケープルートで下山しました。長時間の登山に音をあげる生徒もいましたが、お互い励まし合いながら歩くことができました。3日目は奥大日岳を経て大日平へ下る縦走でした。奥大日岳まではなだらかな道が続きましたが、山頂を越えてからは険しいガレ場や岩場が多く、一人ずつ慎重に鎖場や梯子を通過して行きました。最後の宿では、ハンモックに揺られたり流れ星を探したり大部屋でおしゃべりをしたりと、昼間の登山での恐怖と緊張から解放されて思い思いに過ごしていました。4日目は一気に登山口まで下り、日本一の落差を誇る称名滝へ足をのびました。その後立山のホテルで入浴、昼食後帰路につき、西宮北口で解散しました。歩けば刻々と変化する山の景色、疲れた体を癒す夕日の美しさ、自然の中での友人との語り合い…普段都会に暮らす生徒たちにとってかけがえのない経験となったことでしょう。伝統ある「夏山登山」がこれからも様々な方のご協力のもと、安全に実行していけるよう願っています。

（夏山登山ディレクター）

エンパワーメントプログラムの報告

7月23日(月)から27日(金)まで、S2-1名、S1-5名、J3-38名を対象に、エンパワーメントプログラムが開催されました。ISAを通して集められた8名の学生がグループリーダーとしてプログラム中のいろいろな活動を導き、参加した生徒たちは楽しみながら内容の濃い充実した5日間を過ごしました。今回はファシリテーターがジャマイカ出身、リーダーもアメリカの大学生に加え、日本の大学に留学中のインドネシア、モロッコ、ジンバブエ出身の学生たちで、プログラム中に出身国の紹介もあり、国際色豊かなプログラムとなりました。

5日間のプログラム中、参加者は個人でもグループでも何回も英語でプレゼンテーションをおこないました。初日には小さな声でしか発表できなかった生徒もいましたが、最終日には全員が大きな声で、自信をもって、笑顔でプレゼンテーションをおこなうことができました。エンパワーメントプログラムに参加したことが自分の人生の転機の一つになったと発表する生徒も見られました。リーダーから多くの影響を受けたと発表した生徒もいました。

今年は例年以上に満足感を得た生徒が多く、とても楽しかったという感想が多く聞かれました。勇気を出して、リーダーに話しかけ、自分の英語が通じる喜びを感じた生徒が多くいました。単なる英語研修プログラムではなく、自分の夢や人生について真剣に考え、自分に誇りを持つことができたプログラムとなったことも喜ばしいことでした。

（中上部教諭）

2018年度文化祭報告

2018年度中高部文化祭は、9月14日(金)に校内用、翌15日(土)に校外用として開催されました。近年の異常気象の影響か、今年は文化祭本番直前に、台風などの自然災害のために臨時休校が続き、準備のリズムも大幅に崩れ、時間も減少し、舞台のリハーサルの時間も相当に限定されるという極度にイレギュラーな状態の中、担当する生徒たち、教員ともどもが、迅速で的確な判断力と実践力とを試されるハードな日々を過ごしました。特に、文化祭企画実行委員の生徒たち、講堂での舞台を支える文化部の生徒たちの、混乱を表に出さずに懸命に努力する姿、それを目にした生徒、そして教職員の方々が、何も言わずに気持ちよく力を貸してくださる姿には、尊敬の念を抱くと同時に、感謝の気持ちで何度も涙が出そうになりました。本当にありがとうございました。

さて、今年度の文化祭のテーマは「if」。「もしも……だったら」という夢の世界を、学校内に繰り広げることが目標でした。

校内用の日、最初に催されるバラエティショーでは、数々の有志団体がその多才ぶりを発揮し、中高部全体を感動と爆笑の渦に引き込みました。いつも感じるのですが、生徒たちは幸せを運んでくる天才です。先輩の凛々しくもユーモアに溢れた姿がもたらすオーラが後輩たちにも受け継がれ、この美しい学校が成り立っているのだなと実感します。

私は今年、文化祭企画実行委員会の顧問になっておりましたので、文化祭のテーマやポスターがどのようにして選ばれるか、パンフレットがどれほど緻密な作業と斬新なアイデアのもとに作られているか、各クラス・クラブ・有志団体が、どれほどの細かい計画と綿密な打ち合わせのもとに展示や舞台を創り上げているか、その蔭で、どれほどの多くの人が心を砕いて企画を練り、校内各所の装飾や掲示物、案内や清掃の作業を分担して請け負っているか、ということを見聞きして、身にしみてその思いの深さを感じ取りました。そして、本番では、そのすべてが、来校してくださった方々の笑顔のために用いられるのだということに、改めて大きな気づきを得ました。まさしく「夢の世界」の現出

です。

来校した他校の高校生が話していたという「なんでこんなに盛り上がるのだろう」という言葉が、今年度の文化祭のすべてを表していると思います。文化祭は、単なるひとつのイベントではない、この行事を通じて、人の温かさやその力の偉大さを知り、ひいては、人の生き方を知るのだと思います。私自身は至らないことだらけではありましたが、多くの自戒とともに、限りない勇気と力をいただきました。このような機会を与えられましたことを、心から有り難く思っています。そして、来年度以降の文化祭がますます発展してゆくこと、すべての人に幸せに満ちた笑顔をプレゼントできる日となることを確信しています。

最後になりましたが、今年度の文化祭を築き上げてくださったすべての方々、さまざまな場面で助け支えてくださったすべての方々、文化祭を楽しんでくださったすべての方々に、切にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

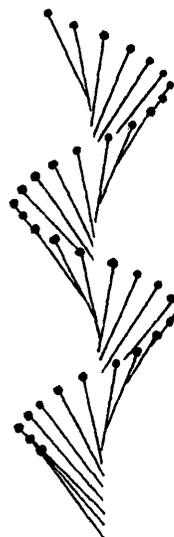
(中高部教諭)

校内読書感想文コンクールについて

今年度も夏休み中、J2とS2は宿題で、その他の学年は自由参加で校内読書感想文コンクールをおこなった。先生方から推薦された優秀作を、図書委員の先生方が審査して、以下のように入選作を決定した。(() 内は、書名。) また、校内選考で決定された優秀作は第46回兵庫県私立学校読書感想文コンクールへ応募し、特選5名(☆印)、入選1名(◇印)に入賞した。

11月21日(水)の礼拝時に、校内コンクールの表彰式をおこない、S2Bの生徒が自作の朗読をした。

(中高部図書室司書教諭)



2018年度キャンパス見学会

今年度の中高部キャンパス見学会は11月17日(土)に開催されました。

昨年度は入場受付時の雨と混雑のため、ご来校いただいた方々にご迷惑をおかけしてしまいました。今年度は週間予報に反して晴天、受付の対応の改善策も功を奏して、入場はスムーズにおこなわれました。ただ、今年度も713組、1703人の皆さんに来校いただき、さらに模擬授業やキャンパスツアー、プラネタリウムなどの抽選や整理券の希望者が入場時に集中するため、来年度に向けて、さらに改めるべき点を考える必要がありそうです。

しかし、例年多くの来校者を迎え、特に入学を考える小学生の皆さんの希望に満ちた瞳にふれるたびに、私たちはこの美しいキャンパスで、日々活気ある時間を過ごしていることに深い感謝の思いを抱きます。新カリキュラムなど、これから中高教育の場も大きく変化していきます。しかしそこで英語教育の充実や生徒主体の学びなど、新たな時代の教育目標として設定されている点が、実はこの神戸女学院が創立以来大切にしてきた点そのものであることを実感します。こうした「変化」の時代にあつてこそ、礼拝や生徒の自主自律など、「変わらぬ」ものを尊重し、その普遍的な価値を広く伝えていくことこそが、このキャンパス見学会のような広報活動の目的であると考えています。

(校務課)

「秋の子ども会」報告

去る11月23日(金)、本校を会場にして、恒例の秋の子ども会が開催されました。当日は、有志のグループリーダーと高等学部の新旧役員会のメンバーが入念な準備をしつつ、神戸真生塾の子どもたち19名の到着を待ちました。

朝10時過ぎに開会、今回の実行委員長であるS3生徒による開会宣言がなされた後、子どもたちは屋内で、ポップアップカードや牛乳パックを用いたパタパタ舟の作成、そして、折り紙やあやとりに興じました。それぞれが「自分だけのお姉さん」とのひとときを満喫したようです。

お昼は、S役員会のメンバーが腕によりをかけたハヤシライスとマカロニサラダが試食室にてふるまわれました。お代わりする人も続出し、お腹も心も満足できるひとときとなりました。

昼食後は、ボール遊びや大縄遊びをして楽しい時間を過ごしました。そして、午後2時過ぎに、役員会メンバー手作りのフルーツゼリーをいただいた後、子どもたちは、S料理研究部が作ったクッキーなど、多くのお土産を抱え、本校のスタッフに見送られ、笑顔で帰っていきました。

今回は天候にも恵まれ、役員会メンバーをはじめとするたくさんの生徒たちの尽力のお蔭で、実に楽しく充実した一日を過ごすことができました。ここに心より感謝申し上げ、「報告」とさせていただきます。なお、引率教員は5名でした。

(高等学部役員会顧問)

<課外活動紹介>

[クラブ]

J文芸部

部長

J文芸部はJ2 9人とJ1 3人の部員が毎週火曜日と金曜日に創作活動の練習やことば遊びゲームをして活動しています。部員数が少ないせいもあり、部員同士の仲がとても良いです。1、2学期の初めに「For」、毎学期終わりに「大和撫子」、文化祭ではその年のテーマを軸に部員全員が約3ページずつ書いた作品を掲載した特別冊子を発行しています。また、文化祭では、冊子配布に加えて謎解きゲームの企画展示もおこないます。今年は部員の予想を上回る大盛況で、充実感を感じることができました。

[クラブ]

Jギター部

部長

私たちJギター部はJ1の12人、J2の9人の合わせて21人で毎週月・火・金曜日に活動しています。1年に約6回の舞台があり、最も大きな舞台である文化祭では1人約8曲を演奏します。その文化祭の曲は主に夏休み中に練習をし、特に合宿では1日に8時間以上、個人や合奏の練習をします。合宿中はわからないところを教えあったり、苦手な曲をひたすら練習したりできる貴重な時間です。私は合宿での練習をととても大事にしています。これからも互いに協力し合いながら頑張っていこうと思います。



[クラブ] Sバドミントン部

部長

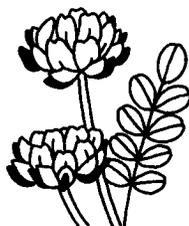
私たちは週3日活動しています。部員はほとんどJから続けていて、Jの時ほど毎日練習できないものの、少ない練習時間でも強くなれるよう頑張っています。他校のようにコーチがいないこともあって、卒業生の先輩に教えていただいたり、他校の先生にアドバイスをもらったりと、自分たちができることを探しながら練習メニューを考えています。まとまった時間練習できる年3回の合宿は、体はとも疲れるものの、切磋琢磨しながらみんなでワイワイ楽しんでいます。

[クラブ] S書道部

部長

S書道部は毎週火・金曜日に書道室で活動しています。年3回ある展覧会や文化祭出品のために、数ヶ月間かけてひたすら納得がいくまで練習します。

文化祭ではここ数年、S2生徒たちによる書道パフォーマンスを毎年おこなっています。緊張の中、一人一人が筆を動かし、それが1つの大きな作品(約3m×4.5m)になった時の何とも言えない満足感と仲間との一体感は、一生忘れられない思い出になりました。



〈学院日誌〉

9月5日(水)	中高部教員会議	10月24日(水)	理事会
9月14日(金)(校内用)・ 15日(土)(校外用)	中高部文化祭	10月31日(水)	中高部教員会議
9月19日(水)	中高部教員会議	11月14日(水)	中高部教員会議
9月25日(火)	中学部入試説明会	11月16日(金)	教授会
9月26日(水)	理事会	11月17日(土)	中高部キャンパス見学会
9月29日(土)	神戸女学院特別講演会「落語家と いう生き方～伝統を受け継ぐ、育 てる、伝える～」	11月28日(水)	理事会 中高部教員会議
10月1日(月)～5日(金)	高等学部修学旅行	12月1日(土)	2017年度ご寄付者対象 神戸女学 院教育振興会クリスマスの集い
10月3日(水)～5日(金)	中学部小旅行	12月19日(水)	理事会 中高部教員会議
10月10日(水)	中高部教員会議	12月21日(金)	教授会
10月12日(金)	合否判定教授会		
10月19日(金)	教授会		

目 次

女は大学に行くな、……………	1
KCC だより……………	3
神戸女学院特別講演会 落語家という生き方…	5
重文建物美装化（一期）と講堂耐震補強完了…	6
学院リトリート報告……………	8
2018年度 宗教強調週間……………	8
留学報告……………	11
史料室の窓・岡田山の自然……………	13
キャンパスお気に入りの場所……………	15
大学報告	
「和紅茶」の産学連携開発とルクアでの試飲販売…	16
後輩と共に考える、「より良い大学生活」…	16
プロジェクト科目「神戸女学院を創る」…	17
防災ウォッチ in 名古屋……………	17
卒業生を起用した交通広告を掲出……………	18
連続テレビ小説「まんぷく」ロケを実施…	18
LL 教室が新しくなりました……………	18
留学生紹介……………	19
留学生自己紹介……………	19
派遣留学報告……………	22
認定留学報告……………	24
語学研修報告……………	24
ACUCA Student Camp……………	27
音楽学部夏期講習会報告……………	28
夏期インターンシップ実施報告……………	28
インターンシップ参加報告……………	29
2018年度大学教授会研修会報告……………	30

2018年度岡田山祭「花蝶風月」……………	30
大学クローバー賞授賞式……………	31
2018年度めぐみ会賞……………	31
私の研究……………	32
ゼミ紹介……………	33
課外活動紹介……………	34
中高部報告	
高校選手権に出場して……………	35
スポーツチャンバラの全日本大会で……………	35
私たちの団体戦……………	36
2018年度中高部芸術鑑賞会……………	36
S 校内大会……………	38
J 校内大会……………	38
米加田先生との出会い……………	39
夏の修養会 広島訪問報告……………	39
夏の修養会 白浜訪問……………	40
2018年度リーダーシップトレーニングキャンプ…	40
2018年度 第17回訪豪研修旅行報告……………	41
夏山登山……………	42
エンパワメントプログラムの報告……………	42
2018年度文化祭報告……………	43
校内読書感想文コンクールについて……………	47
2018年度キャンパス見学会……………	49
「秋の子ども会」報告……………	49
課外活動紹介……………	50
学院日誌……………	52

下記ページは個人情報保護等のため掲載しておりません。ご了承ください。

7, 10, 12, 14, 37, 44～46